化屋大島遺跡

——西彼杵郡多良見町所在弥生時代
石棺群の発掘調査記録——

多良見町文化財調査報告書第２集

1974

多良見町教育委員会

発刊にあたって

このたび化屋大島遺跡の発掘調査報告書を公刊するはこびとなりましたが，さきに公刊いたしました伊木力川遺跡の調査報告につぐ本書は第２集であります。

化屋大島遺跡は，すでに昭和38年来，弥生時代の墓地として注目されていたものでありますが，町内においてのみならず数少い大村湾沿岸の弥生時代遺跡として，その内容は注目されてまいりました。その化屋遺跡を発掘調査するに至りましたのは，同地において株式会社熊谷組によって住宅団地が建設されることになり，建設事業にさきだって記録保存の必要が生じたからでありました。つまり最も今日的な〈開発と文化財〉という問題解決の方向として発掘調査の実施によって精緻な記録保存をはかりたいと考えたからでありました。

調査は８月の災天下に行われ，調査員各位の真摯な態度は，ご覧いただく調査内容とともに私ども深く敬意を表するものでありました。同時に，歴史というものの組立てがこのような学究の集積によって行われるということを感ぜしめるものでありました。

この調査実現にあたりましては，事業者熊谷組の方々の深い理解とご協力がありましたことを町民とともに深く謝意を表したいとおもいます。さらに今回の調査が県下各地から多くの先生方が調査に参加されて行われたということに対して深い感銘をおぼえる次第であります。

最後になりましたが，調査を担当いただき，調査資料の整理から報告書執筆に至るまでご努力いただいた県文化課の方々，理解と協力によって側面的に調査をすすめられた熊谷組の方々，また調査団の裏方として大きな努力を払われた町婦人会の方々に深く謝意を表したいと思います。

昭和49年８月31日

多良見町長　前田　正

報告書第２集の公刊を喜ぶ

このたび当町文化財調査報告書第２集として化屋大島石棺群の調査報告書を刊行するはこびとなりました。

本遺跡は弥生時代の墓域として古くから注目されておりましたが，このたびその発掘調査の成果を公刊のはこびとなりましたことは喜びにたえません。本県の弥生時代の姿は北九州文化圏にあって，その影響を強くうけながらも特異なものをもつとされております。農耕を基盤としたといわれる弥生時代の社会でありますが，化屋遺跡の立地する当地方の弥生時代の人々，私達の遠い祖先が波静かな大村湾の一角で，どのような暮しをしていたものか甚だ興味深いものがあります。

化屋遺跡の調査は住宅団地造成に先立って実施された緊急発掘調査として行われたもので調査を県文化課に依頼し，事業主体熊谷組の理解と協力を得て実現したものであります。

今回の調査及び報告書の刊行には多くの方々の努力の結集がありましたが，直接に調査の担当から資料の整理，更には報文執筆まで終始努力された県文化課の方々，事業者熊谷組の方々による理解と後援，また調査団の裏方として調査活動を側面的に推進された婦人会の方々，その他関係者の方々には深い敬意の謝意を表したいと思います。

昭和49年８月31日

多良見町教育長　　中　路　孝　重

例　　言

1．本報告書は長崎県西彼杵郡多良見町化屋名中大島119所在化屋大島遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は多良見町教育委員会が主催し，調査には昭和48年度長崎県埋蔵文化財発掘技術者講習会参加者があたった。

3．執筆は井上和夫が行なったが，II・III章は調査参加者全員の記録した日誌をまとめたものである。原稿は正林護，田川肇，高野晋司に供覧し，承認を得た。

4．本文中の挿図の実測，製図者名は図表目次に明記した。

5．巻末図版の写真は殆ど井上の撮影になるが，遺構写真の一部は他調査員の撮影にかかるものもある。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の環境と立地 …… 1

Ⅱ　調　査　経　過 …… 2

　1．調査に至る経過 …… 2

　2．調 査 の 経 過 …… 2

Ⅲ　調　査　結　果 …… 6

　1．層　　序 …… 6

　2．1　号　石　棺 …… 6

　3．2　号　石　棺 …… 9

　4．3　号　石　棺 …… 10

　5．4　号　石　棺 …… 11

　6．5　号　石　棺 …… 12

　7．6　号　石　棺 …… 13

　8．7　号　石　棺 …… 13

Ⅳ　遺　　物 …… 15

Ⅴ　後　　論 …… 16

　1．化屋大島遺跡について …… 16

　2．肥前西部の石棺墓について　―概観― …… 19

図　表　目　次

第１図　遺跡周辺地図

2　遺跡地形図----------（田川肇指導・全員実測　藤田和裕製図）

3　石棺配置図----------（　　〃　　井上和夫製図）

4　層序模式図----------（井上作成）

5　１号石棺（昭和38年実測）----------（石丸太郎・川道岩見実測　井上製図）

6　１号石棺----------（力武一成・斉藤武男・加藤十久雄実測　井上製図）

7　２号石棺----------（本田俐・左近充正明・岡本晃・原田博二実測　〃　）

8　３号石棺----------（　〃　）

9　４号石棺----------（川道岩見・樋口希輝・植村高義・長野崇実測　〃　）

10　５号石棺----------（荒木登志男・浦山博子実測　〃　）

11　６号石棺----------（加藤・斉藤実測　〃　）

　　７号石棺----------（斉藤・樋口・浦山実測　〃　）

12　遺物実測図----------（井上実測　〃　）

13　石棺計測分布図----------（井上作成）

14　石棺分布図----------（　〃　）

第１表　化屋大島石棺計測表

2　石棺地名表

図 版 目 次

1．化屋大島全景→印遺跡

遺跡遠景

2．調査風景

講習会風景

3．1号石棺　1．棺　蓋

2．棺　身

4．2号石棺　1．棺　蓋

2．棺　身

3．遺物出土状況

5．3号石棺　1．全　景

2．石材抜跡

6．4号石棺

7．5号石棺

8．6号石棺　1．全　景

2．棺身及び墓壙

3．遺物出土状況

9．遺　物　1．1号石棺出土鉢形土器

2．2号石棺出土壺形土器

3．6号石棺出土壺形土器

4．攪乱層出土石鏃

10．調査後1年を経た遺跡（中央の小高い丘が化屋大島）

●算用数字は巻末地名表番号と同じ　　○印散布地

（長崎県土木部河川開発課提供）

第１図　遺跡周辺地形図

II 調 査 経 過

1．調査に至る経過

化屋大島遺跡の発見は昭和38年に遡る。同年10月，土地所有者の石田鉄夫氏は耕作中に石組遺構を発見した。このことは多良見町教育委員会を通じて，県社会教育課に連絡された。通報を受けた県は県文化財専門委員石丸太郎氏及び担当職員を現地に派遣し，石棺であることを確認，実側を行なった。この時弥生式土器が棺内より検出されている。

その後，昭和45年九州横断自動車道が本遺跡付近に予定されたため県文化課による分布調査が行なわれ10基程度の石棺群と予測された。

更に，昭和48年株式会社熊谷組より当該地を含む宅地造成の計画が出され，それに伴う分布調査が再度行なわれ，発掘調査の必要性が指摘された。

一方，県教育委員会は，昭和47年度より発掘技術の向上を図るため講習会を開催しているが，昭和48年度講習会の教材として本遺跡を候補にあげ，多良見町教育委員会，熊谷組との交渉の結果，８月多良見町教育委員会の主催で調査を実施することとなった。

７月から県教育委員会は県内に受講者を募ったが，その間多良見町教育委員会，熊谷組の方々には現地での準備に御協力いただいた。

2．調査の経過

●調査期間

昭和48年８月18日～８月24日

●調 査 地

西彼杵郡多良見町化屋名中大島 119化屋大島遺跡

●調査参加者

正 林　　護　（県文化課職員，講習会講師）
田 川　　肇　（県文化課職員，講習会講師）
高 野 晋 司　（県文化課職員）
井 上 和 夫　（　　〃　　）
力 武 一 成　（松浦市立御厨中学校教頭）
川 道 岩 見　（県立西肥農業高等学校教頭）
斉 藤 武 男　（長崎市立土井首中学校教諭）
本 田　　俐　（県立口加高等学校教諭）
加 藤 十久雄　（県立ろう学校教諭）

樋　口　希　輝　（東彼杵町教育委員会）
左近充　正　明　（長与町教育委員会）
岡　本　　晃　（長崎市教育委員会文化課）
松　尾　司　郎　（瑞穂町役場経済課）
原　田　博　二　（長崎市立博物館）
植　村　高　義　（芦辺町町会議員）
荒　木　登志男　（高来町公民館主事）
浦　山　博　子　（福岡教育大学学生）
多良見町教育委員会

以下，調査日誌を参考に振り返ってみよう。

8月18日（土）曇のち晴

午前11時，多良見町役場で昭和48年長崎県埋蔵文化財発掘技術者講習会の開講式を行なう。

宿舎の化屋公民館で身辺整理後現地へ向う。

慰霊祭のあと，田川肇講師より遺跡の説明。

草刈りのあと調査区設定。

調査区は，本調査が講習会教材ともなっている関係上グリッド法とトレンチ法を併用して設定した。西半は現地形にあわせ12m×8mの方形の調査区を3m四方のグリッドに区切った（但し南側は地形上3m×2mにならざるを得なかった)。各グリッドには東西方向西より東にA，B，C，D，南北方向北より南へ1，2，3と符号をつけ，両者を組合せてあるグリッドを呼ぶことにした。東半はグリッドの線を平行に移動し，東西方向に1.5m×14mのEトレンチ，そのほぼ中央から北の方へ直角にFトレンチを設定した。D－2，D－3グリッド及びEトレンチの表土剝を行なう。

夜，文化財保護法についての講義，講師堤堅県文化課管理係長。

8月19日（日）快晴

昨日設定した全調査区の表土剝ぎを行なう。

D－3グリッドより石棺検出。石棺は検出順に番号を符すことにする。従って本棺は1号石棺となる。これは昭和38年調査されたものである。

Eトレンチより2号石棺検出。

Fトレンチより3号石棺検出。

Fトレンチの中ほどより東へ直角に1.5m×6mのGトレンチを新設。表土剝ぎを行なう。

夜，発掘調査の方法についてスライドを使用して講義。講師正林護。

8月20日（月）快晴

A－1，A－2，A－3，B－2グリッドを掘り進めるも遺構，遺物検出されず。

1，2，3号石棺掘り進める。
2号石棺より壺形土器出土。
D－1グリッドより4号石棺検出。小石多く粗雑。
本日より，レベル移動，平板測量の実習も行なう。
夜，石器実測の方法について講義及び実習。講師田川肇。

8月21日（火）快晴
1～4号石棺，写真撮影のあと実測開始。
GトレンチとEトレンチの間に 1.5m× 5.5mのHトレンチを新設。東部より5号石棺検出。トレンチより南に伸びそうなのでトレンチ拡張Eトレンチとつながる。
2号石棺西の石材をもとにEトレンチを 1.4m×2m北へ拡張する。その結果6号石棺検出。
夜，土器実測の方法について講義及び実習。講師正林護。

8月22日（水）晴
1号石棺，蓋石を除去し棺身の実測を行なう。調査終了。
2号石棺，実測終る。調査終了
3，4号石棺実測。
5号石棺，概形を出し写真撮影，実測に入る。
6号石棺，掘り進める，写真撮影を行なう。
夜，拓本のとり方について講義及び実習。講師正林護。

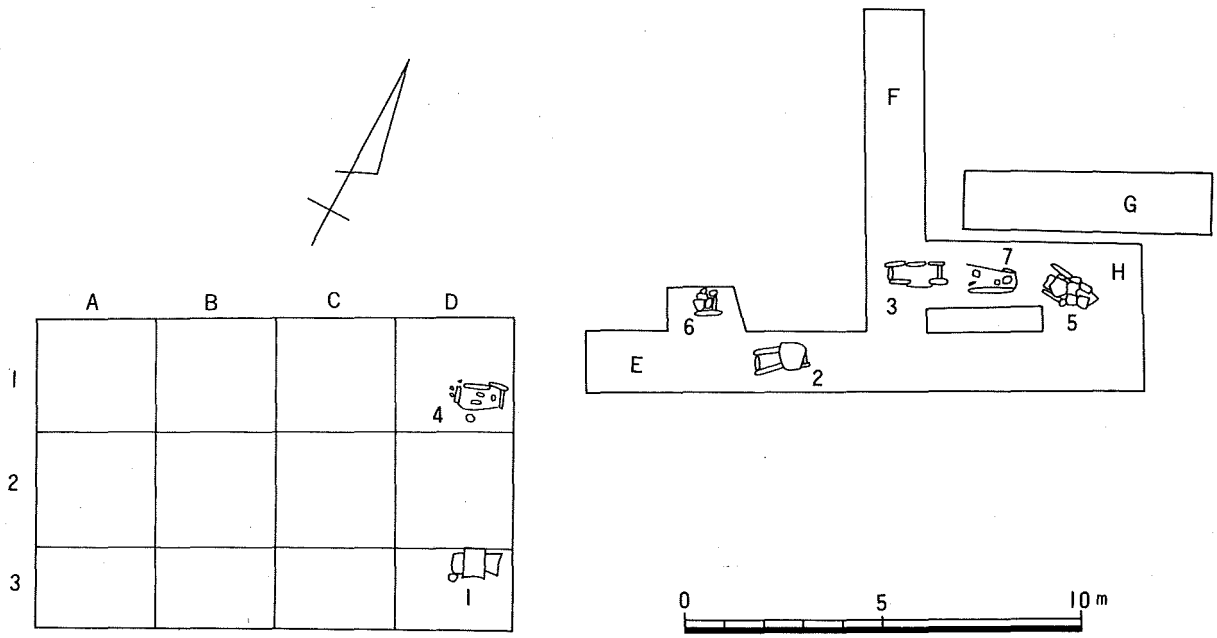
8月23日（木）晴
3号石棺実測終る。調査終了
4，5号石棺実測を行なう。
6号石棺上部実測を終えてから更に掘り進める。
Hトレンチのほぼ中央より7号石棺検出。夜，反省懇談会

8月24日（金）晴
4，5号石棺実測終る。調査終了
6号石棺より壺形土器出土，写真撮影のあと実測。調査終了。
7号石棺写真撮影のあと実測。調査終了
器材片付，身辺整理。
昼食会を兼ねて閉講式を行なう。

上述の如く7日間という限られた日数で7基の石棺を調査できたのは調査参加者の熱意と意

欲によるものであるが，これは亦，事前の諸準備，宿舎，風呂，洗濯等細かい点まで御配慮いただき，われわれを調査に専念できる状態にしていただいた多良見町教育委員会，熊谷組の方々の人知れぬ御苦労の賜物でもある。

更に，昼は真夏の炎天下にさらされ重労働を行ない，夜は各種の講義を受ける強行軍に耐え得る活力源として毎回山海の珍味を提供していただいた馬渡フミ氏他多良見町婦人会の方々の存在も忘れることはできない。ここに記して謝意を表する次第である。

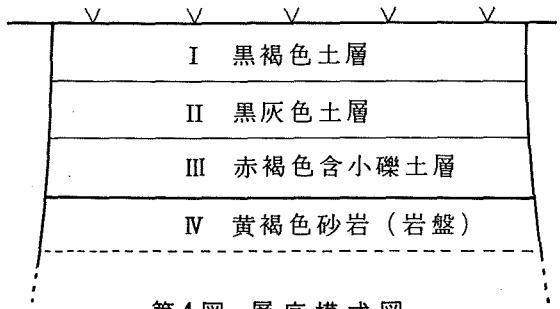


第3図　石棺配置図

III 調 査 結 果

1．層　　序　（第4図）

本遺跡の層序は第4図模式図にみるように単純単調であり，全発掘区において同様であった。地表下35cmまでは攪乱層であり，色調によって更に上下2層に分けうる。（I，II層）黒燿石片等の遺物は全てこの層より検出されている。III層は赤褐色含小礫層で，石棺はこの上面から切りこまれた墓壙に構築されている。約20cmの厚さがある。IV層は黄褐色砂岩の盤である。



第4図　層序模式図

2．1号石棺　（第5，6図，図版3）

D－3グリッドの北東隅より検出された。この石棺は前述の如く本石棺群発見の端緒となったもので，その際にも実測が行なわれている。今回実測したものと若干異なる部分があるが，この方がより原形を留めていると考えられるので併せて図示することにした。

棺身は南壁に板石を2枚使用した他は各壁1枚の板石をもって箱形にしているが，北壁は土圧のため3個に割れていて，中央部が棺内に張りだしてきて弓なりになっている。石材の組方は本来長辺の石材が短辺の石材をはさむような格好で組まれていたと思われる。南西隅が接する如くしているのは土圧の影響であろう。底部には調査時10cm程の黒色軟質土が堆積していた。石材の継目は粘土で目張りしてある。前回調査時棺内東部より鉢形土器が出土している。内法平均値 105cm×40cm深さ40cmを計る。主軸方向N－61°－E。棺身断面形は土圧のため西及び南に傾き平行四辺形を呈する。

蓋石は基本的には3枚の板石をもって覆われている。中央の石材が最も大きく約50×80cmの大きさである。石材は安山岩であるが，棺身，棺蓋とも表面を平滑に調整加工してあり，厚さは6～7cmと平均している。本石棺群の中で遺存度のよさとあわせて最も秀麗な様相を呈している。

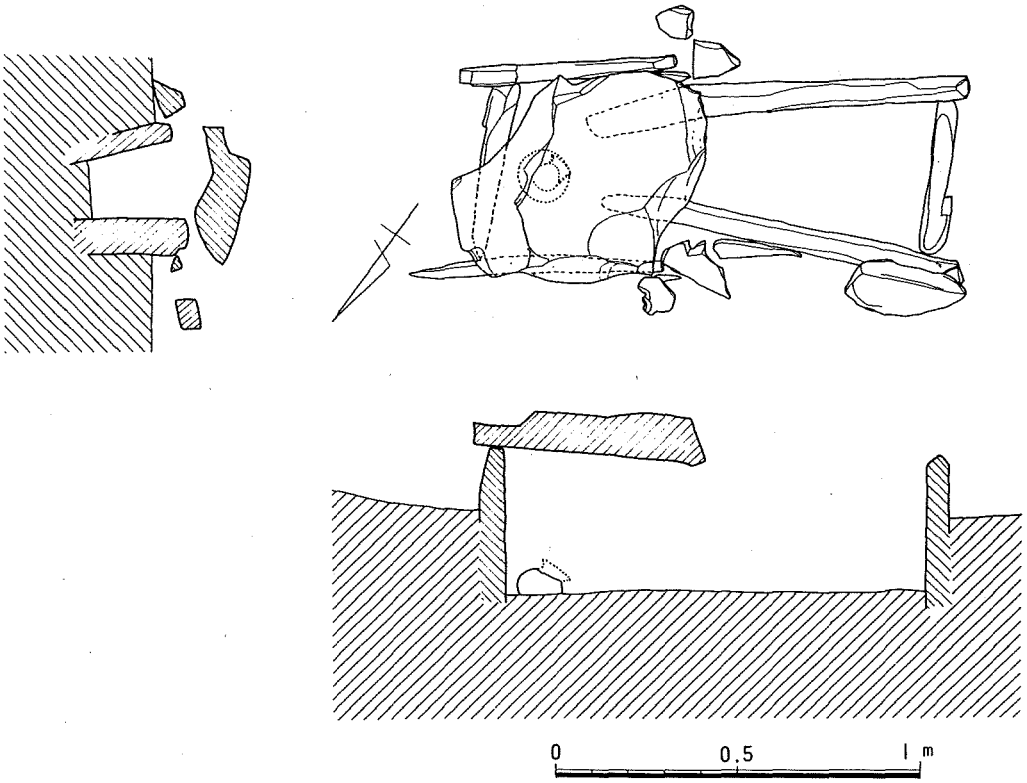
ところで，本石棺は10年の歳月を経て2度実測されたのであるが，両者に若干の差異が認められるので今これらを比較してみたい。棺身については，土中にあったためかさほど変化はみられない。南壁が今回南の方へ傾いているのは両者の実測の精度によるものであろう。棺蓋に

以上みたように棺蓋の東側石材は近年とりかえられたことが分ったが，この新しい板石も平滑に加工されていることは１号石棺同様の石棺が他にも存在していたことを示している。

３．２　号　石　棺　（第７図，図版４）

Ｅトレンチの西端より約５ｍ東の地点から検出された。

棺身は長辺各２枚，短辺各１枚の安山岩板石をもって方形につくられている。石材は長辺石材が短辺石材をはさみこむようにして組んである。長辺側の石材は両壁とも西側に１ｍ前後の長い石を置き，東側には6,70cmの石材が西側石の外側になるようにしておかれていた。２枚の石材は接合部で20cm程重なる。現在西側の長い石は土圧のため東端部が棺内に入り込んで最狭部15cmを計る。棺東側は蓋石が残存していたため原形を保っている。内法平均値 110×45cm，深さ35cmを計る。主軸の方向はＮ－60°－Ｅ。棺身平面形はやや平行四辺形を呈しているが，断面形は長方形をなす。蓋石は65×55cm，厚さ10cmの板状自然石が１枚残っているだけであるが，同様の大きさであればもう１枚あるだけで棺身を覆いうる。周辺にみられる小石は密封用のものであろう。棺内東部より壺形土器出土。

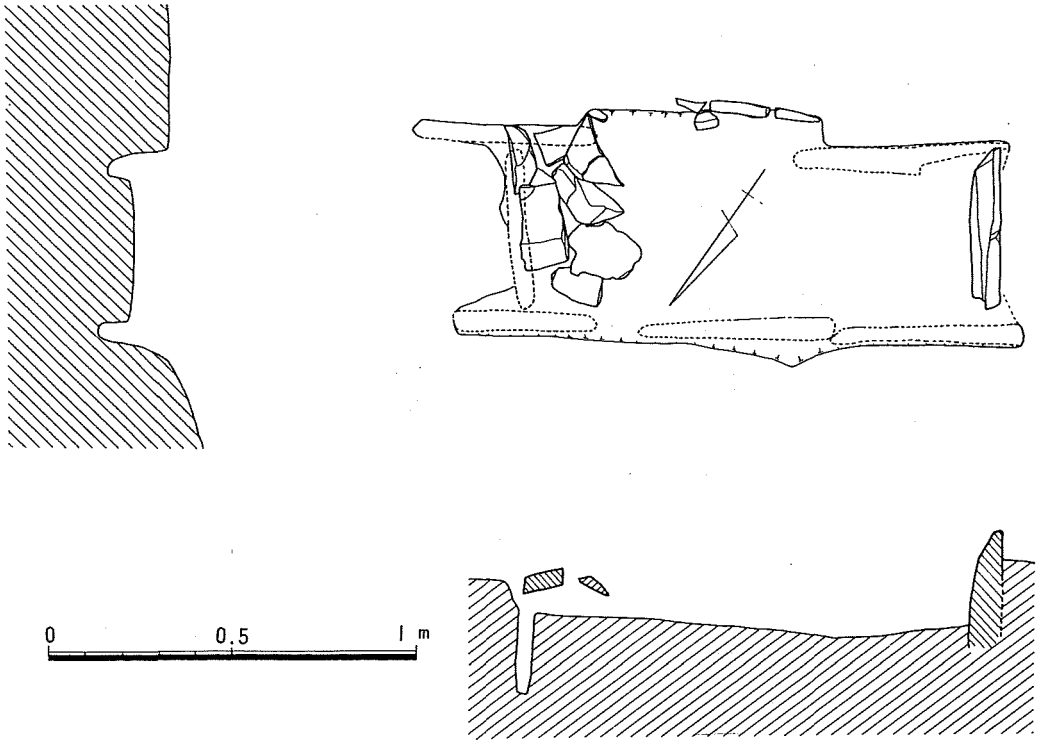


第７図　２　号　石　棺

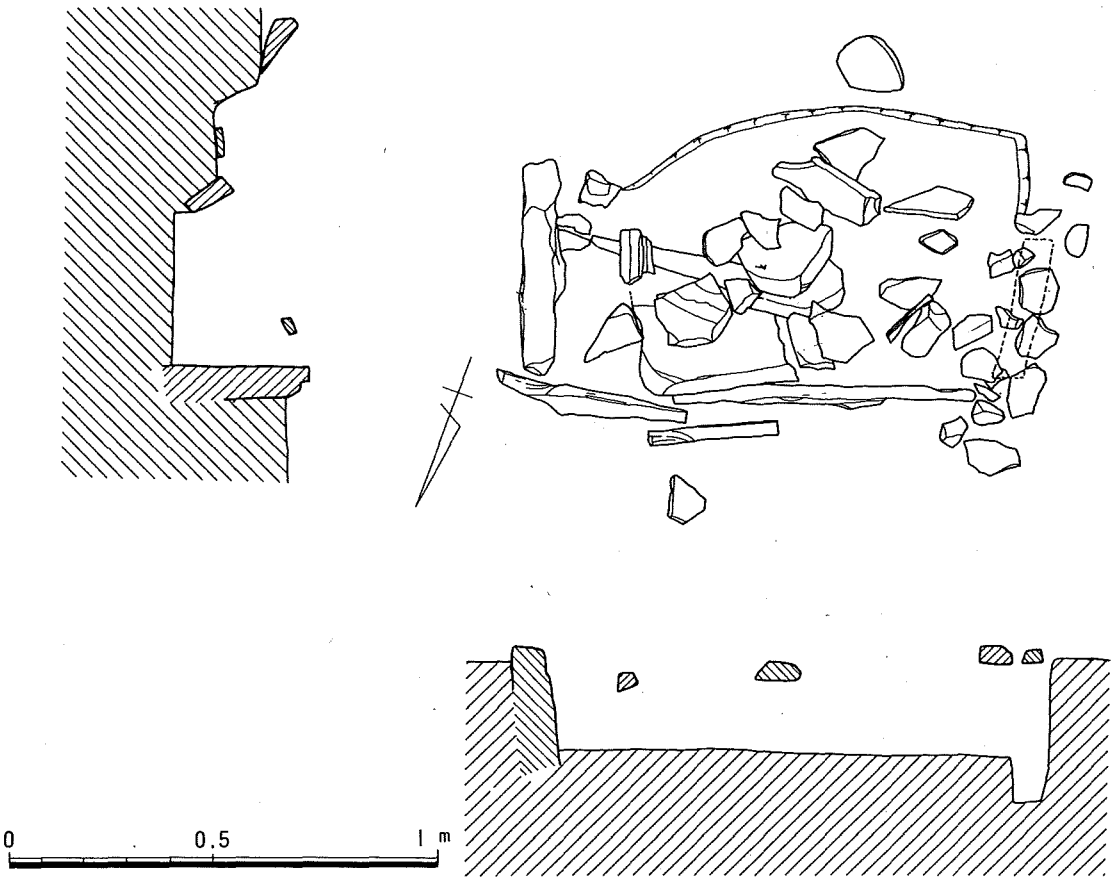
4．3号石棺　（第8図　図版5）

Ｆトレンチと Ｈトレンチの接する地点より検出された。本石棺は残存していた石棺を構成する基本石材は西側の短辺のみであったが，石材の抜跡が明確にみられたため規模形態の復原は可能であり，土圧等の影響もないため却って正確な数値を出しうることができた。

上述のように本石棺は東西両短辺付近に石材がみられただけであったが，掘り進めていくうちに黄褐色砂質土の中に黒色の軟い土が帯状に検出され，棺材の抜跡であることが確認された。北壁は３枚の石材が重なることなく略一直線に並べてある。南壁は中央部を明確にし得ないが同様に３枚の石材で構成されている。壁の構成は中央部の掘方が一段と外側へ拡がっていることから，これに接するように石材をおいてあったとすれば両側の石材と10㎝近く重なって壁をつくっていたといえる。この付近の細長い小石を裏込め用のものであるとするとその可能性は更に強くなる。しかし全体の形状より考えると，中央石材は東側石材と小口を接し，西側石材の外側に10㎝程重なっていたとする方がすっきりする。短辺石材はこの長辺石材にはさみこまれるように置かれている。内法平均値 120×40㎝の長方形を呈する。主軸方向はＮ－55°－Ｅである。石材抜跡の直ぐ外側に掘込がみられる部分もあったが墓壙であるか否か疑問である。



第8図　3　号　石　棺



第9図　4　号　石　棺

5．4 号石棺（第9図，図版6）

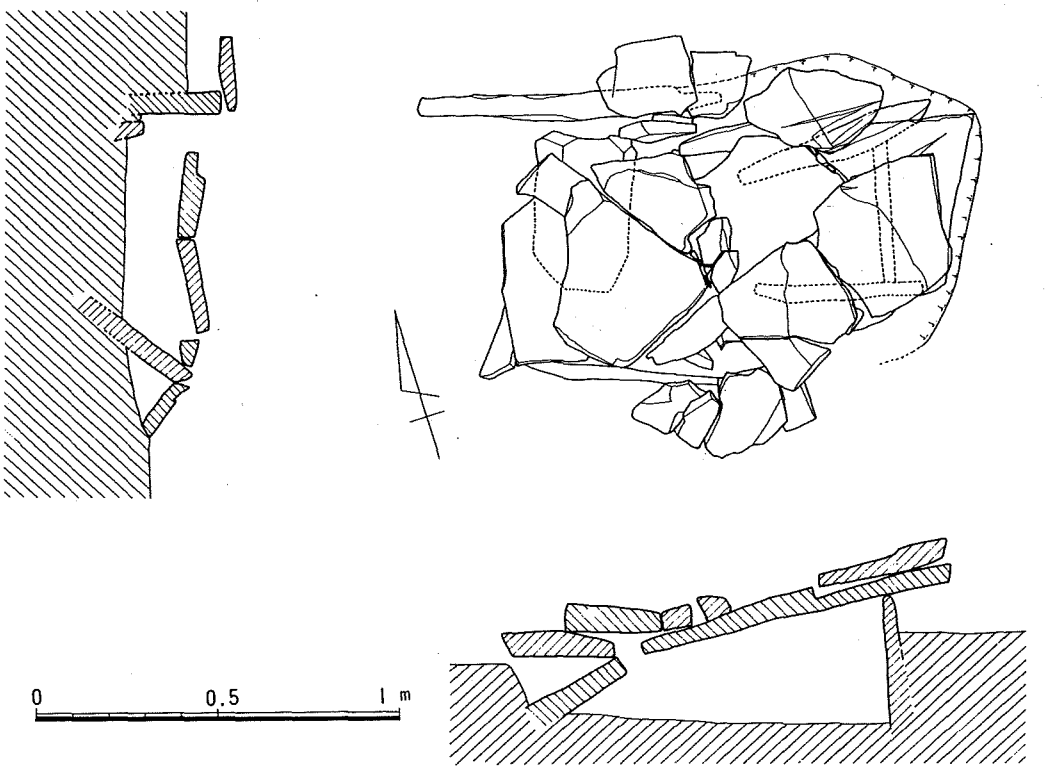
D－1グリッド南東隅より検出された。一面に角礫が散在しており原形を留めないかの如くであったが，これらの石をはずしていくうち側壁や石材抜跡が現れてきて旧状を知り得ることが出来た。

棺身は西・南壁を欠くが西壁部分には石材抜跡がみられた。北壁材は2枚遺存していたが壁面を構成するには西側にもう1枚あったとせねばならない。2枚の石材は5cm程重なって接合されている。短辺の石材は東側55cm，西側34cmの長さがある。南壁の状態が不明なので石材の組方がどうであったか分からないが，他の石棺の如く長辺が短辺をはさみこむような格好であったとすれば平面形か台形を呈し，1～3号石棺の両短辺の差が1～5cmと僅かであることと趣を異にする。又南側で検出された掘込も東部では東側短辺石材の内側に入っていることよりすると，東部の石材の組方は井桁状ではなかったかと推測される。このような石材の組方も亦他の石棺と趣を異にするものであるが，この方がすっきりするし，東南部にある小抜跡の存在も合理的に解釈できる。このように考えた場合石棺の内法は長さ 107cm，巾東部で36cm，西部で34cmとなり平面形は長方形を呈する。主軸方向はN－71°－E。石質は安山岩。

6．5号石棺（第10図，図版7）

Hトレンチ東端より検出された。蓋石が多く，そのためであろうか壁材は内に外に傾いていた。一見繁雑であったが蓋石を除くと棺身が明確にあらわれた。棺身長辺の北壁は3枚の板石を使用して壁を構成しているが，両端の石材だけでも壁長に等しく，中央の石材は両方の石材と全て重なり，両者の石材の隙間を埋めているにすぎない。南壁は2枚の石材で構成されているが中央部で若干重なるように作られている。短辺は各1枚の板石からなり長辺にはさまれた格好になっている。西側短辺は内側に傾いているが，平面形は長方形を呈する。内法平均値95cm×45cm，深さ35cm，主軸の方向はS－74°－Eである。

蓋はまず2枚の板材で棺身を覆った後，更に板石を乗せ2～3重にしてある。石材は安山岩であるが他と異なり軟い。東北方に墓壙と思われる掘込が確認された。



第10図　5　号　石　棺

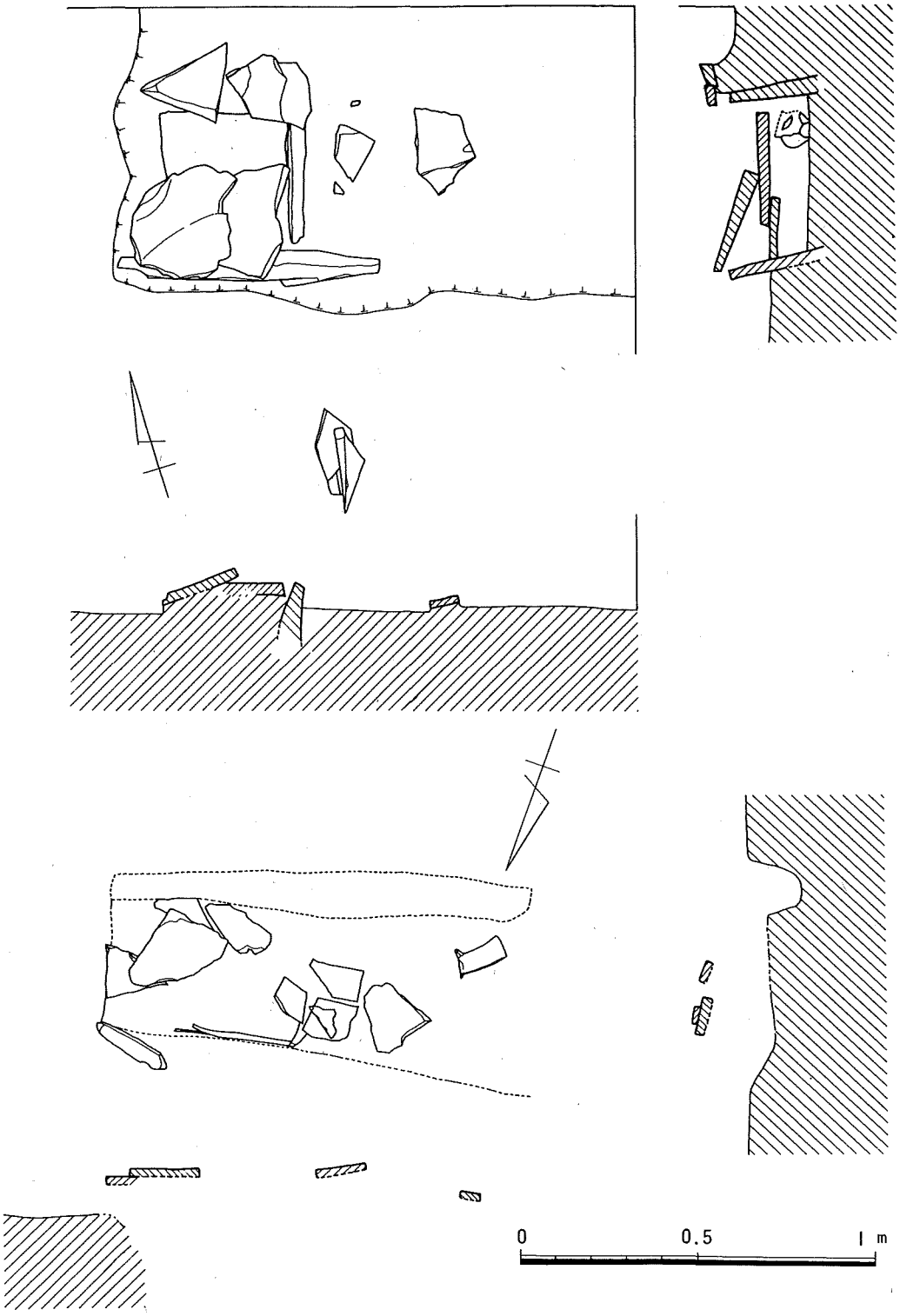
7．6号石棺（第11図上，図版8）

本石棺は2号石棺検出の際，2号石棺の西方約1mの所に板石が検出され，そのつながりを確認するため設定したEトレンチ拡張区より検出されたが，調査の結果では2号石棺西方の板石と本石棺とは関係ないものと考えられる。

本石棺は短辺1枚とそれをはさんだ長辺材2枚が検出されただけで石棺がどちらに伸びるか疑問であった。当初南側長辺石材が西の方に伸びていること，壺形土器が検出されたことや蓋石の落込んだらしきものがみられたことなどから，西に伸びるものでこの短辺は東壁にあたると考えられたが，土質の状況よりすればそうともいえないものがあった。即ち短辺より西は長辺石材の端のあたりに掘込みがみられ，それ以西は周囲の黄褐色の地山と何ら変ることはないのに対し，東側は黒色の軟質土であり，他の石棺同様こちらの方に埋葬施設があったとする方が自然である。従って1枚残っている短辺は石棺の西壁であり，壺形土器は棺外（但し墓壙内）に副葬されたものであると考えられる。東壁部はミカン植樹等で攪乱されているらしく確認できなかった。短辺石材は40cmの長さがあり石棺の幅を示している。主軸の方向はN—63°－Eである。石材は安山岩であるが質はよくない。

8．7号石棺（第11図下）

Hトレンチ3号石棺と5号石棺の間より検出された。遺存度は最も悪く，かなり削平されていた。僅かに残った南壁石材の抜跡より石棺であることが確認された。南壁石材の抜跡は幅8～12cm，長さ 118cm，深さ10cm程あり1枚石であったと思われる。北壁も略一直線に掘方が検出されたので同様一枚石であった可能性がある。内法推定値105×35cm，西の方がやや広くなる。主軸の方向はN－70°－Eである。



第11図　6・7号石棺実測図

Ⅳ 遺　　物

1．鉢形土器（第12図－1，図版9－1）

昭和38年調査時1号石棺内東部より出土したもので完形品である。焼成は良いが部分的にはげやすい所もある。色調は赤褐色を呈す。表面の一部は磨かれている。口縁部は17×18cmの不整円形である。高さ約10cm。胴部は口縁端より1cm程下が最大径となり，口縁部はやや内弯する。口縁端は丸く仕上げてある。石田鉄夫氏蔵。

2．壺形土器（第12図－2，図版9－2）

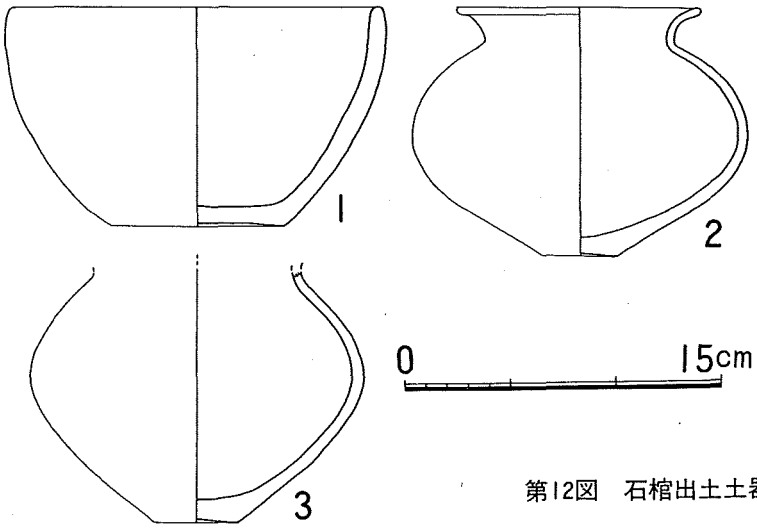
2号石棺内東部より出土したものである。口縁部の一部を欠くが略完形品である。全体黄褐色を呈す。焼成は良くなくもろくはげやすい。胎土に細砂粒を含んでいる。全体に薄手につくられている。口縁径11.4cm，器高12cmを計る。口縁は低く，端は丸く仕上げてある。

胴部は扁球状で中央よりやや上が最大径となり15.7cmある。上半部はゆるやかなカーブをえがくが，下半部は直線的というよりむしろ凹み気味につくられており，底部へまっすぐすぼんでいく。底部は 3.5cmと小さく，ややあげ底気味である。全体になめらかにつくられており，明確な稜線や沈線・突帯・刻目等の装飾は一切みられない。

3．壺形土器（第12図－3，図版9－3）

6号石棺外より出土したもので，出土当時10数片に破砕していたが復原可能であった。口縁部を欠くが本来口縁部を打欠いて副葬されたものと思われる。焼成は良くなくもろくはげやすい。全体に赤褐色を呈す。推定器高13.7cm，同口縁径12.8cmを計る。胴部は上半部はゆるやかなカーブを描き，下半部は直線的にすぼまっていくのは2と同じであるが器高が高くなっている。最大径は胴中央よりやや上にあり15.8cmある。底部は小さく径4cmあり，上底になっている。

1，2は弥生時代前期末，3は中期初頭に位置づけられる。



第12図　石棺出土土器実測図

V　後　　論

1．化屋大島遺跡について

化屋大島遺跡は前章までに述べたように，弥生時代前期末～中期初頭の比較的短期間に営まれた７基の箱式石棺（註１）よりなっていた。以下二，三の問題点をあげ検討してみたい。

範囲及び石棺墓数

弥生時代の埋葬址が群在することは広く知られた事実である。本遺跡では７基の石棺墓が検出されたが，地元民の話，分布調査の結果などから他にも存在する（した）ことは疑いないことである。範囲（墓域）や数量はどれくらいであっただろうか。

本遺跡は，現地形は段々畑となっており，原状を留めていないため南北方向についてはその範囲を定め難いが，弥生時代前期の集落が海抜５ｍ前後に現われ（註２），墓地は住居より高い位置に営なまれた（註３）とすれば，南限を６，７ｍの等高線あたりに求められよう。北限については尾根よりも南側と検討をつけたい。東西方向については，Ａ・Ｂ・Ｃの全グリッドを調査したにもかかわらず遺構を検出できなかったことより，墓域の西限を１，４号石棺の検出されたＤグリッドに求めることができる。東限については５号石棺より５ｍ程東から崖になっている。周辺の等高線の様子よりみて，これは旧地形のままであるとは思われないがそれほど削られているとも思われないので，東限を崖の手前に求めることができる。

以上のように想定するなら墓域の範囲は約20ｍ四方となる。石棺数については今回の調査区が任意に設定されたとして面積比の単純計算をすると30基程度という数値がでてくるが，実際にはボーリング調査等によって調査区は設定されるので，実数は30基を下回ることは考えられる。最大値として一応の目安にはなろう。一方，最小値については昭和45年分布調査の際10基程度の存在が考えられ，これには今回調査と重複しないものもあるので15基程度になろう。総じて本遺跡は20基前後の石棺より構成されていたと思われる。

構　　造

本遺跡から検出された７基の石棺身各部の計測値は第１表の如くである。

主軸の方向は大まかには東西方向であるが５号石棺と他石棺は東西軸をはさんで40度の扁差をもっている。厳密にいえば，多くは東北と東北東の間にあり，東北東よりが多い。これは等高線と同じ方向であることに気付く。斜面上に石棺を構築する場合，長軸を等高線と平行させるのが最も合理的な構築方であることは明らかである。そこで斜面に立地する場合主軸方向は等高線の方向によって決定されたと考えることができる。しかしながら，箱式石棺の主軸が東

第１表　石棺各部計測表

（単位：cm）

号数	方位	外法		内法				墓壙		長辺使用枚数		副葬品
		長	幅	長	西幅	東幅	深	長	幅	北	南	
1	N－61°－E	132	53	105	45	46	43	?	?	1	2	鉢形土器
2	N－60°－E	152	59	117	42	47	38	?	?	2	2	壺形土器
3	N－55°－E	168	60	120	45	46	25	?	65	3	3	
4	N－71°－E	123	?	107	34	36	23	?	70？	2	?	
5	S－74°－E	137	58	95	?	40	40	一部確認		3	2	
6	N－63°－E	?	57	?	40	?	?	一部確認		?	?	壺形土器
7	N－70°－E	118	?	105？	?	35	?	?	?	1？	1	

西方向をとるものが多いことは既に知られた事実であり（註４），後述するように肥前西部についてもその傾向はうかがい得ることであり，そこに埋葬観念のあることを示唆している。従って，石棺の設置には先づ東西方向という観念があり，本遺跡の如く斜面に立地する場合，構築上等高線と同一方向に向ける方が都合がよいので南北に向く斜面（本遺跡の場合南向）が選ばれたとすることができる。

石棺の長さについてみると外法と内法の差が幅のそれに比べて大きいが，これは本遺跡の石棺が基本的に 工 形を呈しているためにおこる当然の結果である。６号石棺は短辺側が片方しか検出されなかったため，石棺がどちらに伸びるか疑問であったが，第Ⅲ章で述べたように東に伸びると思われる。そうすると南側長辺側の棺身から西へはみだす部分は約50cmになり，次に長い３号石棺の２倍もあり，異常に長いといえるが，これはその部分から副葬土器が出土したことによって納得がいく。即ち，土器を棺外に副葬するため，その分の余地を確保する必要が生じたため墓壙を広くとり，それに接するように壁材をおいたと考えられる。古墳時代例ではあるが，鳥取県東伯郡所在橋津古墳（註５）の石棺が板石で２分され一方に副葬品が納めてあったことより想像を逞しくすれば，墓壙の西端にも板石が立っており石棺の内部が２分されていたと考えることもできる（これに相応しい板石が土器の上に覆いかぶさっていた）。

内法の長さは95～ 120cmと短かく成人を葬る場合伸展葬を行なうには不可能である。小児用石棺としての可能性もあるが，幅が成人伸展葬用石棺のものと変らないのでやはり成人用石棺としてとらえたい。このように考えるなら，本遺跡の埋葬法は森貞次郎氏が弥生時代通有の埋葬法として指摘された如く屈肢葬であったと考えられる。（註６）

幅についてみると両端の数値の分っているものは全て東側が広い。これは棺内副葬土器の位置と考えあわせて頭位の問題にかかわると思われる。即ち，幅の広い方，副葬品のあった方が頭部と考えると１～４号石棺は東頭位であったとすることができる。一方，５～７号石棺については，片方の数値が不明であるが長辺側石材の重なり具合や棺外副葬品の位置（棺内と同じく頭部に副葬されたと考える場合）などから西頭位を思わせる。鹿児島県指宿郡所在成川遺跡

（註７）では性別により頭位の異なる傾向があることが指摘されているが，人骨の検出されていない本遺跡では不明である。

墓壙は一部確認できたものもあったが全体については確認できなかった。これは３号石棺で石材の抜跡部分だけ黒色軟質土が充満していたことから分るように墓壙を掘った排土をもって壁材を固定しているためで，墓壙を確認できたのは色調や土質の差でなく，硬さの違いが分った部分だけである。従って平面形等不明であるが，石材抜跡のある断面形が ⌐∪∪⌐ 形を呈していることより，墓壙底部は平板でなく棺底部分が一段と高くつくられていたと考えられる。

本遺跡の石棺身は全て板状石材を用いて構築されているが，使用枚数については５枚（１号石棺），６枚（２号石棺），７枚（５号石棺），８枚（３号石棺）と種々である（７号石棺は４枚の可能性がある）。短辺側の石材は全て１枚であるから，長辺に使用された枚数が異なる訳である。ここで石材の組方をみると全体形が 工 形を呈し，長辺側が短辺側をはさみこむように組まれていることは前述したが，複数の石材を使用した長辺側についてみると接合の仕方に２通り認められる。一は，１号石棺南壁，３号石棺北壁にみられるように接合部は両方の石材の小口部分に限られ全体に直線的になるつくり方であり，他は，２・５号石棺にみられるように，両方の石材に重なりあう部分が出るようなつくり方である。この場合両長辺の石材の重なり方は主軸を中心として対象的になる。３号石棺南壁は東側石材と中央石材は小口で接し，中央石材と西側石材は重ねて構築されていると考えられるので，両者は使用石材の形態に応じて適当に採用されていたと思われる。

（註）

1．遺骸を収める一形式として存在するのであるから箱形石棺と称すべきであり，箱式石棺と箱形石棺は区別さるべきであると考えるが，ここでは慣習に従った。

2．和島誠一・麻生優・田中義昭「北九州における後氷期の海進海退について」
和島『日本考古学の発達と科学的精神』所収　1973

3．森貞次郎「埋葬」
新版考古学講座４　1969

4．鏡山　猛「原始箱式棺の様相」
『九州考古学論巧』所収　1972

5．斉藤　忠『日本古墳の研究』吉川弘文館　1961

6．註３に同じ

7．『成川遺跡』埋蔵文化財調査報告第７　文化庁　1974

2．肥前西部の石棺墓について――概観――

肥前西部に石棺墓を有する遺跡は巻末地名表に示す如く88箇所あるが，これらの多くはかって存在していたこと以上には不明な点が多い。石棺は構築する時と同様破壊するのにも少人数で事足り，副葬品等ないものが多いので話題になることもなく人知れず破壊されたものも多いと思われる。このような中にあって長崎大学，小田富士雄氏，樋口隆康氏等により離島を中心として調査され成果を挙げたことは特筆さるべきことである。本節ではこれらの調査されたものを中心に主要な石棺墓遺跡を略説し，本地方の石棺の変遷を辿ってみたい。見出の番号は地名表の番号と同じ。

(1) 化屋大島遺跡　本報告書のとおり

(6) 風観岳支石墓群（註１）　諫早市と大村市の境界付近標高 200ｍを計る風観岳の鞍部に位置する。十数基の支石墓が確認されている。下部構造の分るものは少ないが，１基は長方形の箱式石棺を有している。付近より山ノ寺式の土器が採集されている。

(7) 本明石棺群　諫早市街の北方約２㎞多良山から放射状にのびる舌状台地の突端付近に立地する。昭和15年農道工事に伴い10余基の石棺が発見された。昭和43年にも同様工事によって発見され，翌年にかけ調査された。これらによって20基前後知られた訳であるが，石棺は主軸を略東西に向け，長さは２ｍ前後のものと１ｍ前後のものがあるようである。鉄刀，刀子，鉇等の出土品がある。時期は弥生終末から古墳時代前期。

(11) 小佐古石棺　国鉄大村駅の東方約 400ｍ，多良山麓扇状台地の張り出している標高約30ｍのゆるやかな傾斜地に位置する。昭和44年に１基調査されたが他にも存在するという。石棺は主軸を東西に向け，内法長 168㎝，幅34～43㎝，深さ25㎝を計る。棺身は６枚の板石からなっており，９枚の蓋石で覆われていた。底部には小豆大の小円礫が敷いてあった。遺物は検出されなかった。

(22) 五反田遺跡　東彼杵郡川棚町を貫流する川棚川の堤防線及びその周辺に位置し標高約10ｍを計る。昭和47年堤防欠壊により石棺が現われ調査された。石棺は６基確認されたが主軸方向に整一性はみられなかった。完存のものはなかったが長さは 150～ 180㎝と考えられる。遺物はなかったが，付近より土師器が検出されている。

(23) 松ケ崎古墳　大村湾最北部江上浦に面した小岬の先端に位置する円墳である。 標高約10ｍを計る。昭和48年調査された。石棺は 1.5ｍ×１ｍあり，直刀，土師器等が検出された。

(25) 白浜石棺群　大村湾西岸中央部から大村湾に突出た小台地上にあり標高10ｍを計る。数年前畑開墾中に石棺２基が発見されたというが，規模方向等不明である。他にも存在するという。石棺中より須玖Ⅱ式の丹塗りの壺が出土している。

(33) 深堀遺跡　香焼島を眼前に見る砂丘上に立地する縄文～弥生時代の遺跡である。昭和39年

から40年にかけ３次にわたり調査され，埋葬遺構としては石棺１基，甕棺10基，土壙墓18基が確認されている。これらは時期的にみて縄文晩期に属するもの（４基），弥生時代前期に属するもの（１基），弥生時代中期に属するもの（24基）に分けられるが，箱式石棺は弥生中期のものである。大きさは内法 108×56cm×56cmで，主軸を略北東におく。結晶片岩を板状に割って棺をつくっている。本石棺は遺体埋納後構築されたものである。（註２）

(34) 脇岬遺跡　野母半島先端の橘湾に面する砂丘上に位置する。本石棺は昭和46年縄文時代中期の脇岬遺跡調査の際検出されたもので，板石を使用して棺身を構成している。内法長さ 112cm幅50cm，深さ45cmあり，人骨の他龍泉窯系の青磁器が埋納されていた。この青磁器が後世の流入でないとしたら石棺の時期は鎌倉時代以降とせねばならない。

(41) 有喜貝塚　橘湾に南面する海岸近くの台地上に立地する。大正14年調査された。遺跡自体は縄文時代中後期の貝塚であるが，貝塚上に２基の石棺が検出された。石棺はいずれも東西方向に主軸をおき，規模は１号石棺は 1.5×0.75m，２号石棺は１号石棺の北 1.2mのところにあり，東部を欠くが1.35×0.45mを計る。壁材は半分以上貝層に埋っていた。石棺の近くの土層中の伸展葬人骨が検出されていることより他にも埋葬施設があったと考えられるこの人骨の肋骨下より鉄鏃が１個検出されている。

(43) 原山遺跡　雲仙岳の南麓，諏訪池の東部標高約250mの台地に立地する３群からなる支石墓群で，昭和26年以降数度に及ぶ調査がなされている。昭和35年には45基からなる第３遺跡が完掘された。下部構造として20基の箱式石棺，11基の土壙（内２基には甕棺あり）が確認された。石棺は平面形方形に近く屈葬されたものと考えられている。第２遺跡の石棺も小形で80×60cm前後の大きさである。山ノ寺式の壺，浅鉢，甕が副葬品として出土している。

(44) 標高10m内外の海岸に沿い南面して傾斜する小丘陵台地に立地する石棺で昭和36年浜口叶，古田正隆の両氏によって調査された。外法長さ 103 cm，幅75cm，内部の深さ59cmで壁の厚さを10cm程度にした刳抜式の石棺である。底部に堆積した３cm余の土中より石錘２個が検出されている。その他墓地と思われる周辺より，石鍋，土器，白磁，瓦器，人骨等が検出されており，時期は奈良～平安期と考えられている。

(49) 一野遺跡　島原半島の有明海に面して，半島の中央に位置する雲仙岳より放射状に走る多くの舌状台地の中の一台地の突端に位置する。昭和34年38年工事により発見され，甕棺３，土壙１，石棺５基が確認された。石棺は板状自然石を使用して作られているが粗雑なつくりである。石棺５号蓋石上に土師器２個がおかれていたという。本遺跡の年代は弥生中期より古墳時代末期までとされている。

(71) 狸山支石墓群（註３）　狸山と呼ばれる標高40m位の小丘上の南側中腹熊野神社の境内にある。７基の支石墓が確認されており，昭和32年に２基調査された。第５号墓は長約60cm，幅40cm，深40cmの方形の粗製箱式棺が内部主体で８個の支石をもっている。第６号墓も箱式石棺であるが，長方形で副葬品として鰹節型大珠が出土している石棺の内外より縄文晩期夜臼式の土器が採集されている。

(72) 大野台遺跡　標高53～62mの舌状山丘に位置する3地点より32基の石棺，1基の甕棺が確認されている。昭和41年石棺8基，甕棺1基が調査された。石棺の平面形は方形あるいは長方形をなすが概して小形であり深さは深い，方位は甕棺も含めて東南東一西北西，東北東—西南西の内にあり，略東西方向といえる。石棺内外より縄文晩期の夜臼式土器が検出されている。甕棺も同時期のものである。なお「本遺跡は支石墓を形成していた可能性が強い」とされている。

(73) 小川内遺跡　標高25mの台地上に立地する遺跡で昭和44年10基の石棺が調査されたが，後2基が追加確認されている。石棺平面形は方形に近い長方形で長辺は1mを越えるものはない。深さは深く50cm前後のものが多い。夜臼式土器が検出されている。

(75) 栢ノ木遺跡（註4）　松浦市の中央部を貫流する志佐川の流域標高30mの段丘上に位置する遺跡で，昭和45年調査された。石組遺構3，甕棺3が確認されたが更に拡がることが予想されている。東西方向に主軸をおく第2号石組遺構は明らかに石棺であり，石棺内東部には枕石が置かれており，付近より長宜子孫系の舶載内行花文鏡，ガラス玉，管玉が検出されている。甕棺は金海式，立岩式に属するもので弥生前期末よりの遺跡である。

(78)(79) 峰久保古墳及び田助古墳　平戸島北部の田助港の背後の標高50m前後の東南にゆるく傾斜した台地上に立地する。昭和3年に畑を開墾中古墳が発見された。これが田助古墳である。内部主体は主軸を東西にとる箱式石棺で棺内西端近くより半肉刻獣帯鏡，内行花文鏡各1面の他勾玉1，管玉4，硝子玉39，算盤玉が出土している。昭和24年調査の際田助古墳の石材を積んだ壇に接したすぐ横から箱式石棺が見出された。封土はみられなかったがこれが峰久保古墳である。石棺は主軸を南北よりやや西にとり内法長 1.6m，幅35～45cm，深35cmを計る。棺内流入土砂中より田助古墳のものであろう鏡片玉類が検出された。

(80) 度島中学校遺跡　平戸島の北にある度島のやや西寄りの南岸に面した度島免部落の背後高所にある。昭和2年運動場拡張工事の際甕棺4基と箱式石棺3基があらわれた。石棺は大中小あって大きなもので長さ5尺，幅1尺7寸，厚2寸あり主軸方向は東西であった。東頭位の人骨が検出されており，胸部付近より青瑪瑙の管玉が3個出土している。なお石棺は1基であったともいう。

(81) 勝負田古墳　度島の北にある大島西南部の漁港的山から北西海岸へ通じる道を約 500m北上した川内免勝負田墓地の北側にあったもので昭和16，7年に発見されたという。石棺は4枚の板石を長方の箱形に組合せ，長辺は4～5尺位あり天井も床も1枚石でつくられ棺の内部は同様な板石の壁で4区分されていたという，長宜子孫系の内行花文鏡，勾玉が出土している。

(82) 根獅子遺跡　平戸島の中央部西側海岸に面した小砂丘上に立地する。昭和8年頃石棺2基が検出された。石棺は板石4枚で四方を囲い，床も天井も同じ板石でつくられてあった。中の人骨は頭を東南にして側面向きの屈葬形をして周囲に木灰をばらばらとつめたようであった。石棺内には1体ずつ人骨が埋葬されていて，それぞれ前腕に貝輪をはめており一は両

手に３個ずつ他は一腕に６個位であったという。昭和10年にも近くより人骨数体を発掘しているが石囲い等設備はなかった。同時に出土した甕は弥生中期初頭の城ノ越式土器である。

(83) 松原遺跡　宇久島の中心街をなす南向きの入江に形成された弓状砂洲上に立地する。標高３～４ｍを計る。明治５年人骨が発見され，昭和25～６年壺が発見されている。昭和43年に調査が行なわれた。これらによって石棺は２基確認されたが内１基は積石塚である。他に支石墓２基，壺甕棺７基，土壙墓１基が知られた。１号石棺は主軸を南より14°東にとり，長さ約80cm，幅30cm，深30cmと小形である。石棺内より板付Ｉ式の壺形土器が出土し，壺，甕棺の型式は板付II_b～後期前半代のもので遺跡の時期を知ることが出来る。支石墓より貝輪，貝製垂飾品，貝製臼玉が出土している。

(84) 浜郷遺跡　有川港の東方海岸に形成された堤防上砂丘の最高所から背後（陸地側）にかけて立地する。標高は４～５ｍを計る。昭和32年，41年工事により人骨や甕棺，石棺が発見され，昭和42年，44年調査された。これらによって７基の石棺が確認された。内３基は積石塚である。２基の石棺内より板付II式，城ノ越式の壺形土器が出土している。他に壺甕棺18基，石蓋土壙１基，直葬（土壙墓）12があり，壺甕棺の型式は板付II_a～須玖Ｉ式である。副葬品には貝製品が多いが土器（板付II_a～須玖Ｉ）の副葬もみられる。他に碧玉製管玉，獣骨，柱状片刃石斧がある。

(85) 滝河原遺跡　若松島南部滝河原瀬戸に南面して弓形弧を呈する長さ 300ｍの砂礫丘上に立地する。砂礫丘は自然堤防となっているがその中央上に板状の片岩を１× 0.3ｍの長方形の箱形に組合せた石棺がある。主軸方向は北西―南東である。中より人骨が出土したという。他にも存在するという。付近より弥生中期の土器片が採集されている。

以上20余の遺跡を略説したが，これによって石棺墓の変遷をたどってみよう。

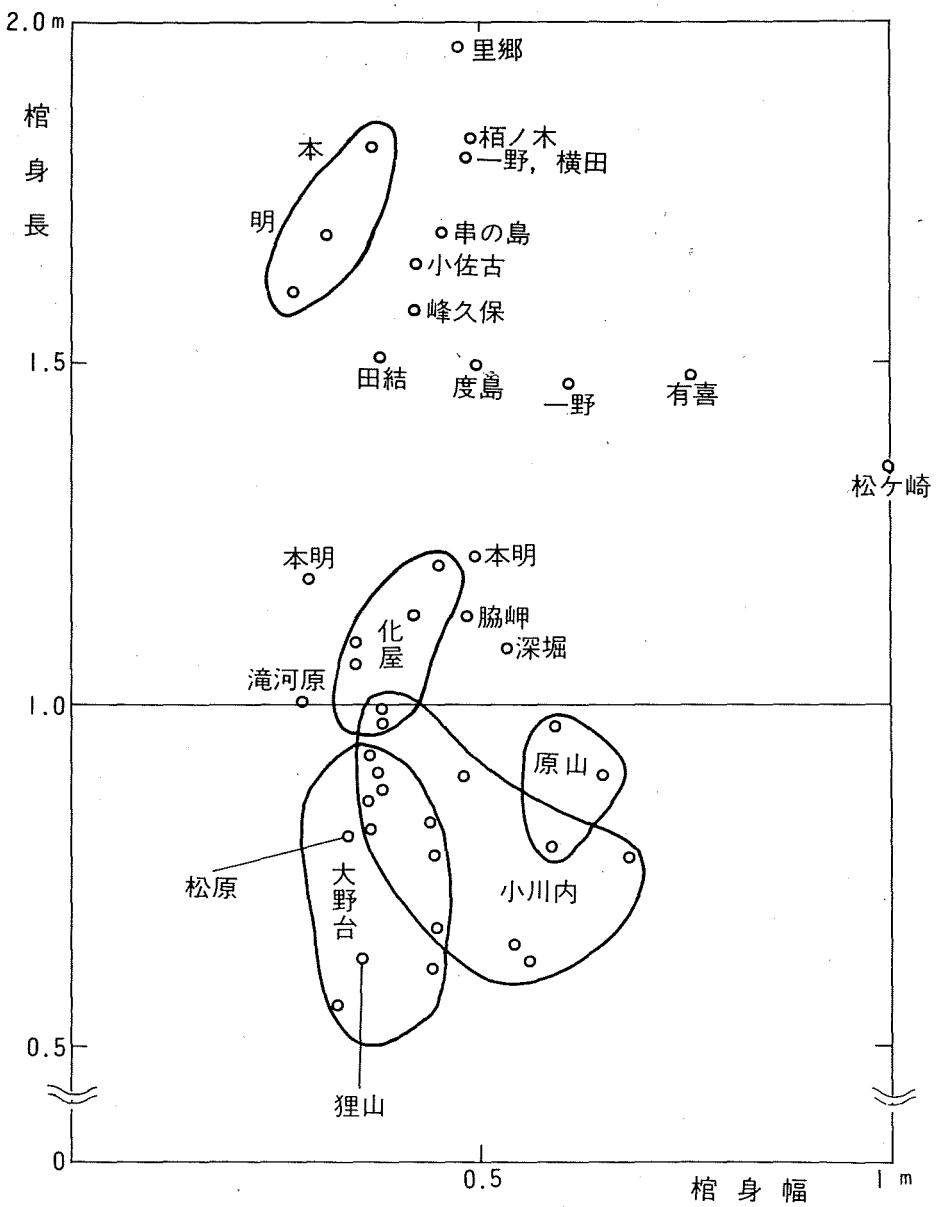
肥前西部に石棺墓の出現するのは縄文時代晩期からである。遺跡は原山遺跡や風観岳支石墓群のように 200ｍを越す高所に営まれたり，北松浦郡の三遺跡のように25～60ｍの台地に営なまれたりする。石棺は常に支石墓の下部構造として存在し，単独で存在することはないことより両者の間に密接な関係のあることが指摘できる。このことは本地方の石棺の発生が自然発生的なものでなく朝鮮半島より支石墓とともに流入したことを推測させる。しかし，その形態は方形に近い長方形で（註５），長辺の長さも１ｍを越えることはなく，そのかわり深さが深く，埋葬にあたっては縄文時代の葬法である屈葬がなされていたことが知られる。里田原遺跡の支石墓の下部構造も箱式石棺である。現在，標高17ｍ前後の水田中に３基残っているが，かつては３群７基存在していたことが知られており，周囲との比高も２ｍ前後あったであろうことも確認されている。一部露出している石棺の長辺は95cmを計る（註６）。本遺跡の一部から縄文晩期の木製堅杵や土器等が検出されており，それらが原位置を保っている可能性は少ないとはいえ，縄文晩期の生活空間が近くに存在したことは事実であり，北松三遺跡との距離，標高の

近似とともにこの支石墓の時期の候補に縄文晩期を加えても差支えないと思われる（註７）。

弥生時代に入ると初期の段階から海岸砂丘地に立地するようになり，縄文晩期との関連性がないかの如くであるが，板付Ｉ式の壺を副葬していた松原遺跡の石棺の規模は縄文晩期のものと変らず，まだ縄文晩期の伝統が残っていたことがうかがえる。松原遺跡では２基の支石墓も確認されている。石棺の幅は前代のものと変らないが長さにおいて長くなる。化屋大島遺跡の場合平均 110cmあり屈肢葬であったことは先に述べた。副葬品は貝輪，土器が多いが，土器は松原遺跡（板付Ｉ），化屋大島遺跡（板付II），浜郷遺跡（城ノ越），白浜石棺群（須玖II）と中期後半まで副葬されている。共同祭祀の有無は不明である。金属器は弥生終末になって現われる。栢ノ木遺跡には内行花文鏡が副葬されていた。古墳時代にかけての本明石棺群からは刀子等が出土している。弥生時代の石棺墓について北部九州との対比において２，３の相違点を指摘できる。前期より石棺墓の存在すること。個々の石棺墓への土器副葬が中期後半までみられること。内行花文鏡を有する石棺が共同墓地の中に他と区別されることなく営なまれていることである。これらは本地方の弥生時代社会構造解明に重要な要素となると思われる。

古墳時代に入ると本地方の古墳の実体が明確でないように石棺についても同様なことがいえる。分布は大村湾東岸，島原半島有明海沿岸の海岸よりの台地突端付近に集中する。この地域は本地方の数少ない平野を構成しており，古墳の造営はこの平野における農耕生産を基礎にしてなされたことを物語っている。石棺は石室の中に収められたものはなく，殆ど直葬である。大村市今富郷所在の黄金山古墳(註８)は横口式の石室をもつが，この石室は組合式石棺を基礎として構築されており，本地方の初期の横穴式石室は石棺との関係が密接であったといえる。古墳の多くは後期であるが，前期に属するものとして，田助古墳，本明石棺群等があるがこれらには顕著な封土はみられず在地的性格が強い。石棺の形式は瓢塚古墳や長塚古墳等の前方後円墳に至るまで全て箱式石棺であり，畿内を中心に分布する割竹形石棺，舟形石棺等や，九州にも一大分布圏をもつ家形石棺もみられない。舟形石棺は唐津市島田塚古墳（註９）長持形石棺は東松浦郡谷口古墳（註10）割竹形石棺は竹田市七ツ森Ａ号古墳（註11）家形石棺は佐賀市西隈古墳（註12）をそれぞれ西限としていることは古墳時代に入ると現在の県境付近で肥前地方を分けることも可能になってくる。このことは石棺に限らず三角縁神獣鏡，埴輪，装飾古墳等の分布についても同様なことがいえる。ただ，田結村役場付近畑に箱式石棺から舟形石棺への移行期の石棺があったとのことであるが詳細は不明である。古墳時代の石棺は長さが 180cm前後となり伸展葬にふさわしく長大化が目につくが，栢ノ木遺跡や本明石棺群の石棺の規模も同様であることは，屈肢葬から伸展葬への変化が弥生時代末期にあったことを示している。

以上は棺身を中心にみてきたが，棺蓋については多くの実例に接しえないためはっきりしないが，時代が新しくなるにつれ使用枚数が増えていくようである。これは棺身が時代とともに



第13図　石棺計測分布図

長大化していくのであるから当然とも思えるが，棺身が2倍になった場合蓋石は2倍以上（多くは3～4倍）になっているのであって，蓋石1枚1枚の長さが短かくなっているのである。従って棺蓋についてみると，縄文晩期は支石墓の下部構造として存在しており撑石が蓋石となり1枚であり，弥生時代に入り2～3枚となり，古墳時代に入ると9枚前後となる傾向がうかがえる。栢ノ木遺跡2号石棺は古墳時代的棺身をもち，弥生時代的蓋石で覆われていて両者の性格を兼備えている。

第13図は以上をまとめる意味で石棺の規模を図表化したものである。（註13）時代別にまとまりをみせ，むらの少ないことが分る。副葬品等遺物のない石棺の時期を求める際，立地と共に参考になろう。

（註）

1　1974．県教委，諫早・大村市教委により分布調査が実施され基が確認された。

2　賀川光夫「深堀遺跡の調査概要」九州考古学23（1964）

3　本遺跡の調査された支石墓の号数について1，2号とするもの，1，3号とするものがあるが，ここでは典拠26－イの森氏論文によった。

4　本遺跡については典拠28の中間報告があるが，これは訂正さるべき点が多いため筆者の観察によって記述した。

5　森貞次郎氏は典拠26－イで石棺を長方形粗製箱式石棺と方形に近い粗製箱式石棺に分け，前者の方が時期が下るとされているが両者の判別は必らずしも明確でない。

6　この数値は典拠29による。

7　1973．12～'74.5に行なわれた試掘調査の結果による。現在報告書作成中。

8　小田富士雄「長崎県大村市，黄金山古墳調査報告」九州考古学39，40（1970）

9　後藤守一「九州北部に於る古墳の2，3」　考古学雑誌12－4（1922）

10　梅原末治「玉島村谷口古墳」　佐賀県文化財調査報告書第2集

11　小田富士雄「九州」『日本の考古学』古墳時代上（1966）

12　『筑後古城山古墳』　大牟田市教育委員会（1972）

13　本図を作成するにあたり，長崎大学医学部助手坂田邦洋氏には，小川内遺跡，本明石棺群等未発表資料の提供をうけた。記して謝意を表したい。

第2表　肥前西部石棺地名表

註　備考欄には伴出埋葬遺構，副葬品を収める。

No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
1	化屋大島遺跡	西彼杵郡多良見町化屋名	7		弥生式土器	1
2	上阿蘇遺跡	〃　多良見町上阿蘇				2
3	阿蘇前遺跡	〃　多良見町阿蘇前				2
4	蔭山遺跡	〃　多良見町中里名蔭山				2
5	貝津遺跡	諫早市貝津町	14			3
6	風観岳支石墓群	〃　大野	10余	支石墓		4
7	本明石棺群	〃　本明町	20余		刀子，土器	6
8	玖島崎	大村市玖島郷				7
9	河内郷古墳群	〃　徳泉河内郷		古墳	鉄片	8
10	八幡宮遺跡	〃　八幡宮	群集			8
11	小佐古石棺群	〃　武部郷	1			9
12	飛行場一帯遺跡	〃　森園町飛行場一帯	群集			8
13	立福寺古墳	〃　立福寺郷		古墳		8
14	鹿の島遺跡	〃				8
15	久津古墳	〃　二の郷久津		古墳		5
16	里郷積石塚	東彼杵郡東彼杵町里郷平		積石塚	石鏃	5
17	才貫田遺跡	〃　東彼杵町里郷平				10
18	串の島遺跡	〃　東彼杵町里郷串の島			赤色素焼土器	5
19	瀬戸遺跡	〃　東彼杵町瀬戸郷瀬戸			紡錘車	5
20	瓢塚古墳	〃　東彼杵町宿郷古金谷	1	前方後円墳		5
21	ワレ権現塚	〃　東彼杵町宿郷古金谷				8
22	五反田遺跡	〃　川棚町上組郷徳島	6			11
23	松ケ崎古墳	佐世保市江上町	1	円墳	鉄刀，土師器	12
24	三島山古墳	〃　広田町三島	10	古墳	須恵器，土師器	13
25	白浜石棺群	西彼杵郡西彼町白浜	2			14
26	前島遺跡	〃　時津町前島	3		土師器	8
27	木場崎遺跡	〃　時津町日並郷木場				8
28	横瀬遺跡	〃　西海町横瀬中屋敷	3			15
29	天久保貝塚付近	〃　西海町天久保				16
30	出津遺跡	〃　外海町出津				8
31	崎山遺跡	長崎市福田町舟津				17
32	高鉾島遺跡	〃　高鉾島		古墳	土師器	8

No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
33	深堀遺跡	長崎市深堀町	1		甕棺，土壙	18
34	脇岬遺跡	西彼杵郡野母崎町脇岬	1		青磁	6
35	牧島遺跡	北高来郡飯盛町池下				8
36	池下遺跡	〃 飯盛町池下	2			8
37	田結貝塚	〃 飯盛町清水名	3			19
38	田結	〃 飯盛町大門	1	積石塚		5
39	田結役場付近	〃 飯盛町	1			5
40	下釜貝塚	〃 飯盛町下釜	4	含積石塚		20
41	有喜貝塚	諫早市有喜町	2	貝塚		21
42	犬丸古墳	南高来郡千々石町南舟津犬丸		古墳	鉄剣，勾玉	5
43	原山遺跡	〃 北有馬町		支石墓	甕棺，土壙	22
44		〃 南有馬町浦田名	1		石錘	23
45	金比羅神社遺跡	〃 南有馬町北岡尾の上		支石墓		8
46	今福遺跡	〃 南有馬町今福塚田				8
47	上鬼塚遺跡	〃 有家町浦ケ河名	1			24
48	景華園遺跡	島原市景華園				8
49	一野遺跡	南高来郡有明町大三東一野	5		鉄刀，須恵器	25
50	道租御前遺跡	〃 有明町大三東松尾			鉄剣	8
51	地蔵山石棺群	〃 有明町				25
52	妙法寺古墳	〃 有明町		古墳		25
53	筏遺跡	〃 国見町神代東里筏				8
54	横田遺跡	〃 吾妻町字山倉	1			33
55	畑島古墳	〃 吾妻町布江畑島		古墳		8
56	馬場鬼塚	〃 吾妻町馬場鬼塚		古墳		8
57	大塚古墳	〃 吾妻町守山坪井大塚	2	前方後円墳		8
58	焼森古墳	〃 栗林共同墓地	1	古墳		8
59	古城墓地古墳	〃 吾妻町古城	1	前方後円墳		8
60	布江鬼塚古墳	〃 吾妻町布江鬼塚	1	古墳		8
61	玉の端古墳	〃 吾妻町玉の端山畑	1	古墳		8
62	荒神古墳	〃 山田川床荒神	1	古墳		8
63	大熊貝塚	〃 吾妻町阿母大熊				8
64	権現山古墳群	〃 愛野町野井今木場		古墳		8
65	鋤先古墳	北高来郡森山町田尻名鋤先		古墳	鉄剣，玉類	8

No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
66	平原古墳	北高来郡高来町大字平原名田淵		古墳		8
67	宇良溝古墳	〃 高来町大字溝口名西口	1	古墳		8
68	帆崎遺跡	〃 小長井町小川原浦名鬼塚	10		鉄刀	8
69	淀姫神社遺跡	〃 小長井町				8
70	下蔭平遺跡	〃 小長井町井崎名下蔭平			甕棺	8
71	狸山支石墓群	北松浦郡佐々町江里狸山	7	支石墓		26
72	大野台遺跡	〃 鹿町町深江免大野	8	支石墓	甕棺，土器	27
73	小川内遺跡	〃 江迎町	10	支石墓		6
74	草尾遺跡	〃 吉井町草の尾				8
75	栢ノ木遺跡	松浦市志佐町栢ノ木免	2		甕棺·土壙·鏡·玉類	28
76	石郷石棺群	北松浦郡鷹島村				33
77	里田原遺跡	〃 田平町里免	1	支石墓		29
78	田助古墳	平戸市大久保免峰久保	1	古墳	鏡・玉類	30
79	峰久保古墳	〃 大久保免峰久保	1	古墳		30
80	度島中学校遺跡	〃	3		甕棺	30
81	勝負田古墳	北松浦郡大島村的山川免	1		鏡	30
82	根獅子遺跡	平戸市根獅子町浜久保	2			30
83	松原遺跡	北松浦郡宇久町平郷松原	3	含積石塚	弥生式土器	31
84	浜郷遺跡	南松浦郡有川町浜郷	7	含積石塚	土器，貝輪	31
85	滝河原遺跡	〃 若松町	1			32
86	橘遺跡	福江市下大津町五社神社			土器	8
87	皆塚遺跡	〃 上崎山町皆塚			土器	8
88	浜郷貝塚	〃 浜町西野郷			土器，貝輪	8

典拠

1．本報告書

2．『多良見町郷土誌』多良見町（1971）

3．『諫早市史』第1巻　諫早市教育委員会（1955）

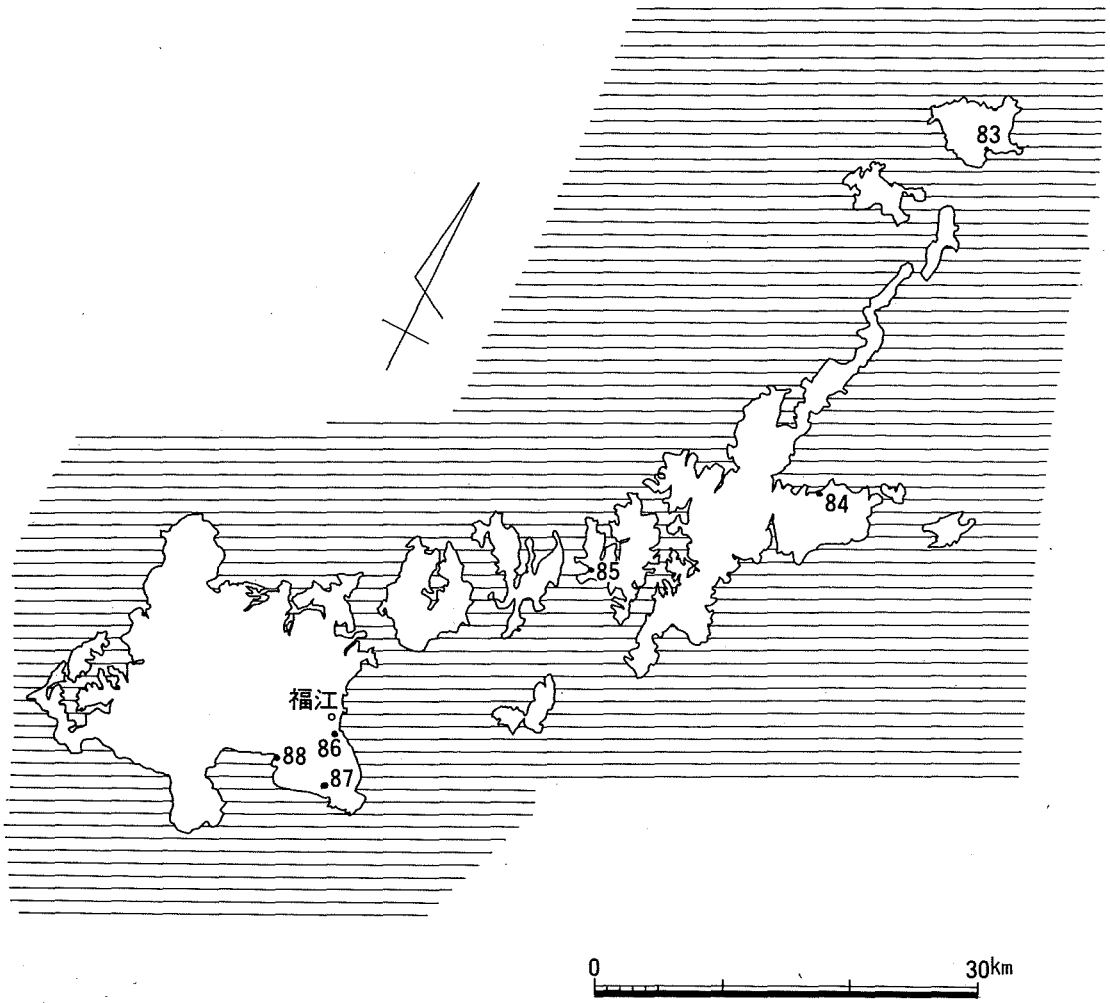
4．古賀力氏御教示

5．津田繁二「我が長崎県の先史時代及び原史時代遺跡遺物の概略について」
長崎談叢第26輯（1940）

6．長崎大学医学部解剖学第2教室調査
坂田邦洋氏御教示

7．田川肇氏御教示

8．『全国遺跡地図（長崎県）』　史跡名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図
文化財保護委員会（1967）
『長崎県遺跡地名表』　埋蔵文化財包蔵地一覧
長崎県文化財調査報告書第１集　長崎県教育委員会（1962），（1963改訂）
9．『大村市武部郷小佐古石組遺構』　長崎大学医学部解剖学第２教室（1969）
10．井手寿謙氏御教示
11．長崎県教育委員会調査
12．佐世保市文化科学館調査　毎日新聞1974．２．11の記事による
13．『広田町三島　三島山古墳試掘報告』　佐世保市文化科学館（1971）
14．長崎県教育委員会踏査
15．『西海町史――概括編――』　西海町（1973）
16．高野晋司氏御教示
17．『長崎県郷土誌』　長崎史談会編（1974　復刻）
18．『深堀遺跡』　長崎県文化財調査報告書第５集　長崎県教育委員会（1966）
19．酒詰仲男『貝塚に学ぶ』学生社（1970）
20．酒詰仲男・中島寿男「肥前下ノ釜貝塚発掘報告」　人類学雑誌58－10（1943）
21．浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦「肥前国有喜貝塚発掘報告」上・下
人類学雑誌41－１.２（1926）
22．(イ)森貞次郎・岡崎敬「島原半島（原山，山の寺，礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査」　九州考古学10（1960）
(ロ)古田正隆『重要遺跡の発見から崩壊までの記録――縄文晩期原山埋葬遺跡――』
百人委員会埋蔵文化財報告第３集（1974）
23．浜口叶・古田正隆「石錘の副葬ある石棺」　九州考古学14（1962）
24．長崎県教育委員会踏査
25．『一野遺跡（南高来郡有明町）』　有明町教育委員会（1964）
26．(イ)森貞次郎「日本における初期の支石墓」　金載元博士回甲紀念論叢所収（1969）
(ロ)森貞次郎「長崎県狸山支石墓（予報）」　九州考古学５．６（1958）
27．『大野台遺跡』　大野台遺跡調査団（1974）
28．正林護『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会（1973）
29．吉田敬市「肥前北松浦郡西部の歴史地理学的考察――長崎県北松浦郡田平町を中心として―」
30．樋口隆康　釣田正哉「平戸の先史文化」　平戸学術調査報告書所収（1951）
31．小田富士雄『五島列島の弥生文化―総説編―』長崎大学医学部人類学考古学研究報告２（1970）
32．桑山龍進「五島一般調査報告」　長崎県文化財調査報告書第２集所収
長崎県教育委員会（1962）
33．長崎県教育委員会記録による



第14図　肥前西部石棺分布図

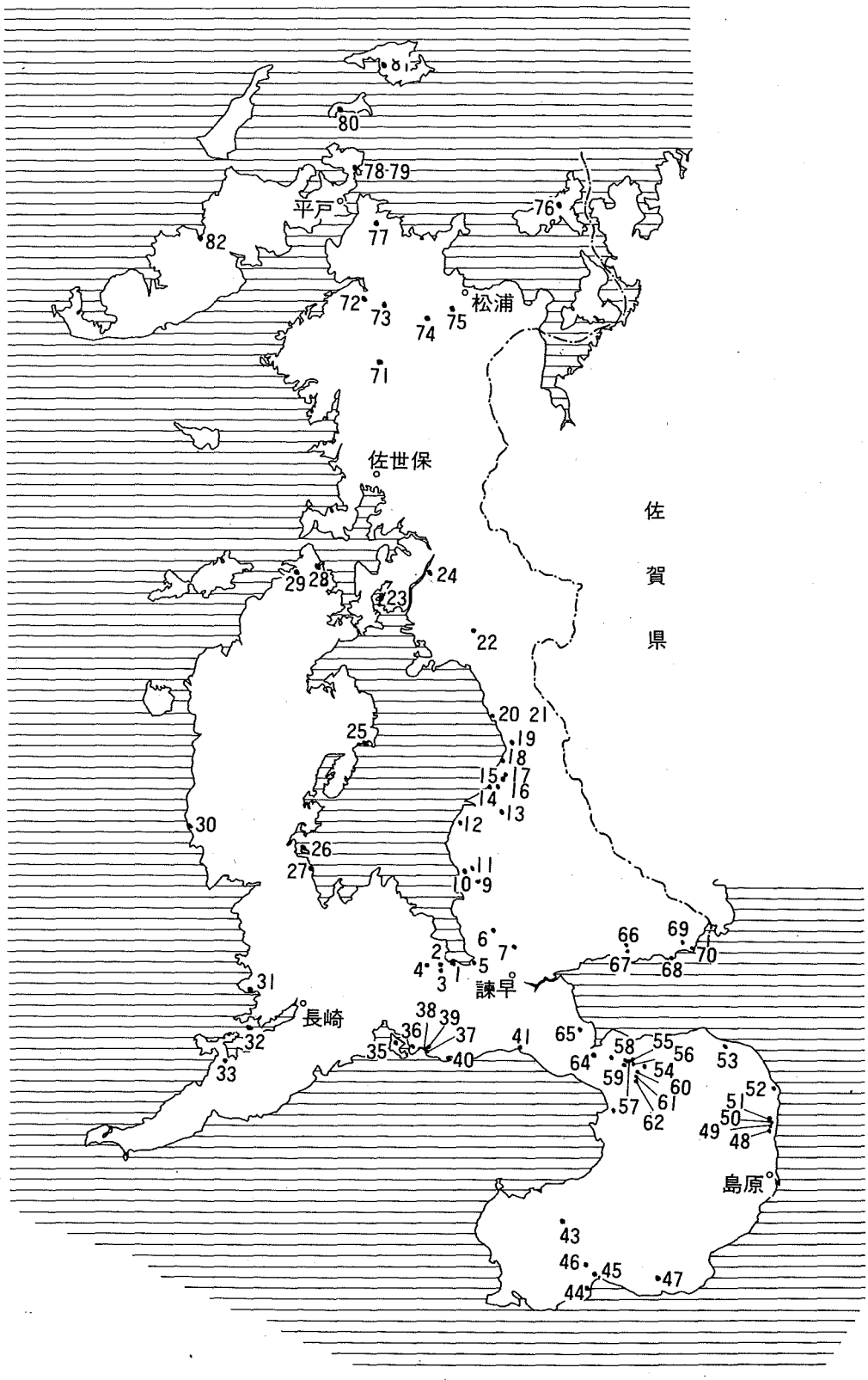
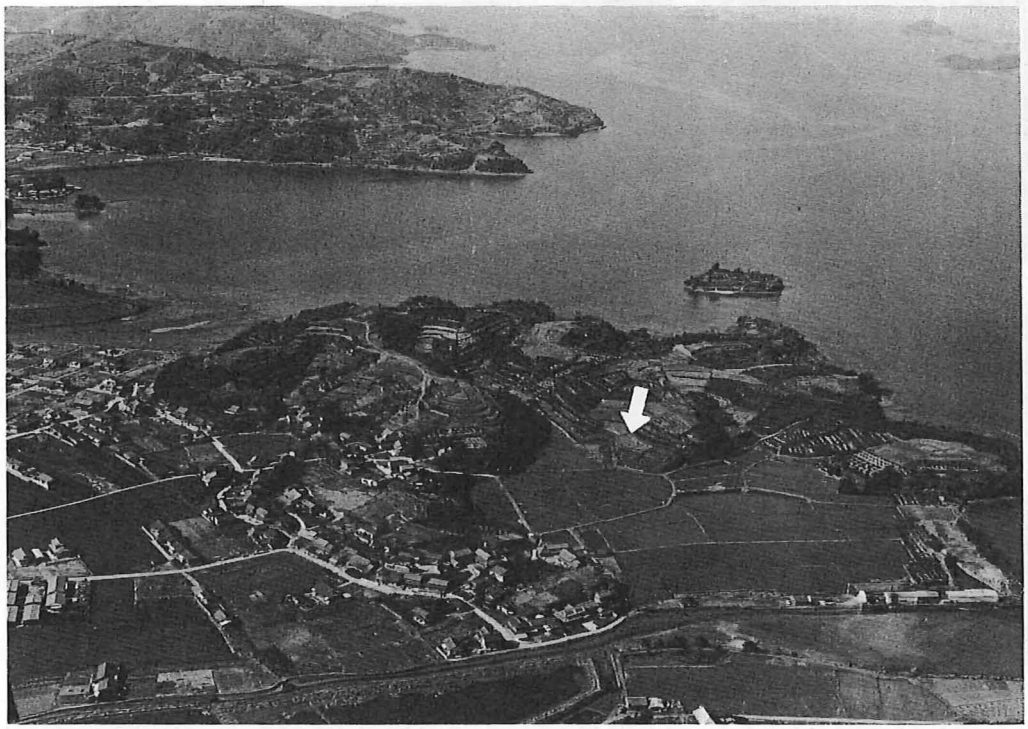
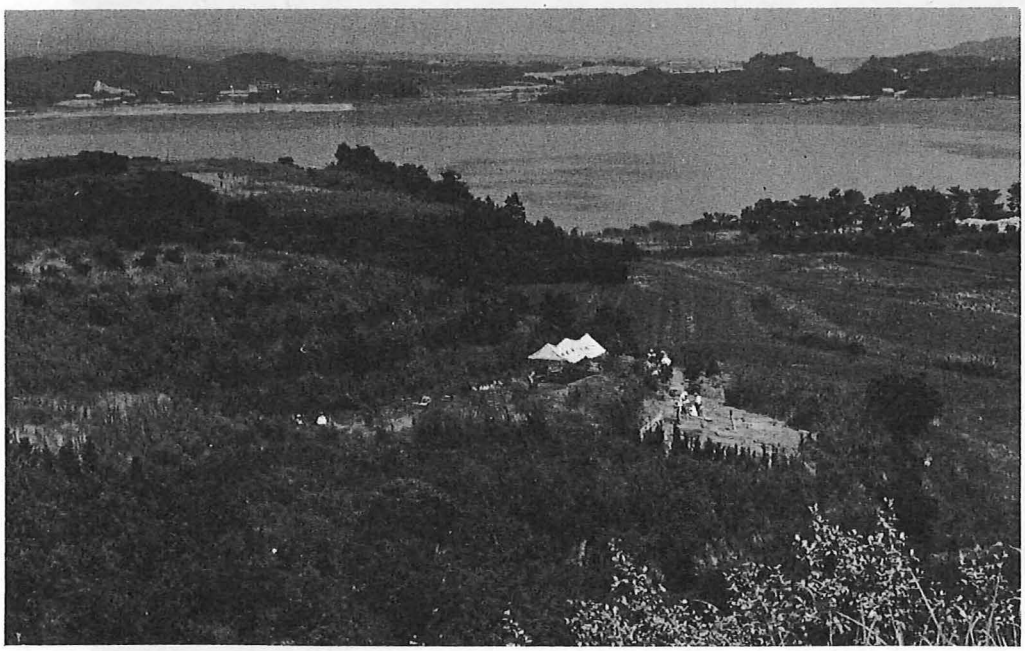

81
80
78·79
平戸
76
77
82
72
73
松浦
74
75
71
佐世保
佐賀県
29
28
24
23
22
20
21
25
19
18
15
17
16
14
13
30
12
26
27
11
10
9
6
7
66
69
2
5
67
68
70
4
1
3
諫早
31
長崎
38
39
36
37
41
65
32
35
40
58
55
56
53
64
54
59
60
52
61
51
57
62
50
49
48
33
島原
43
46
45
47
44

図　　版

図版 1



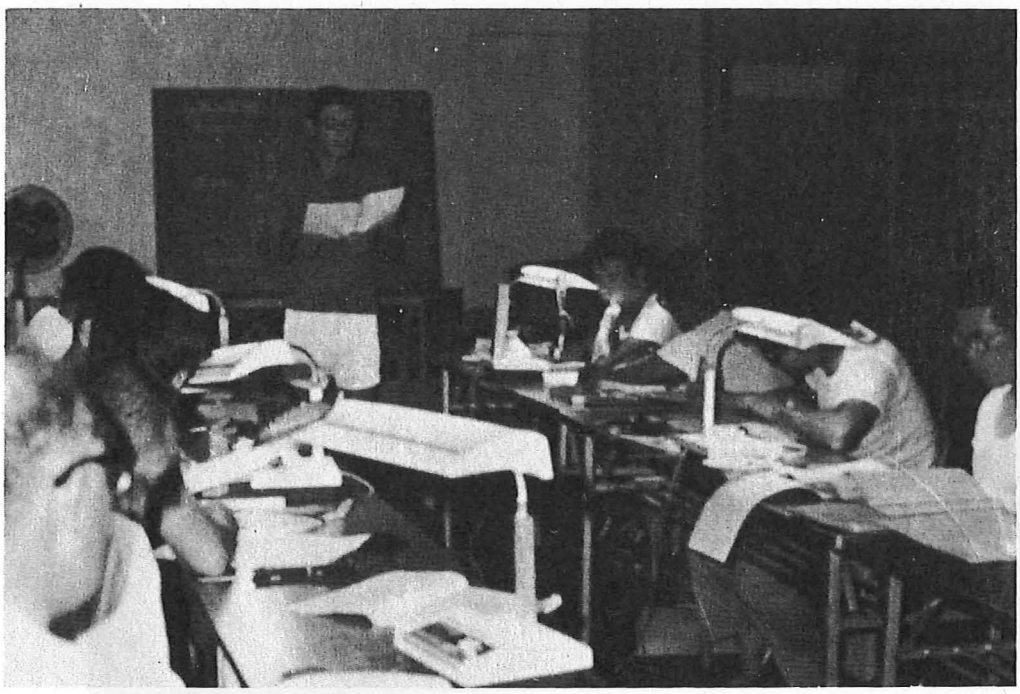
1．化屋大島全景 ⇨ 印遺跡



2．遺跡遠景

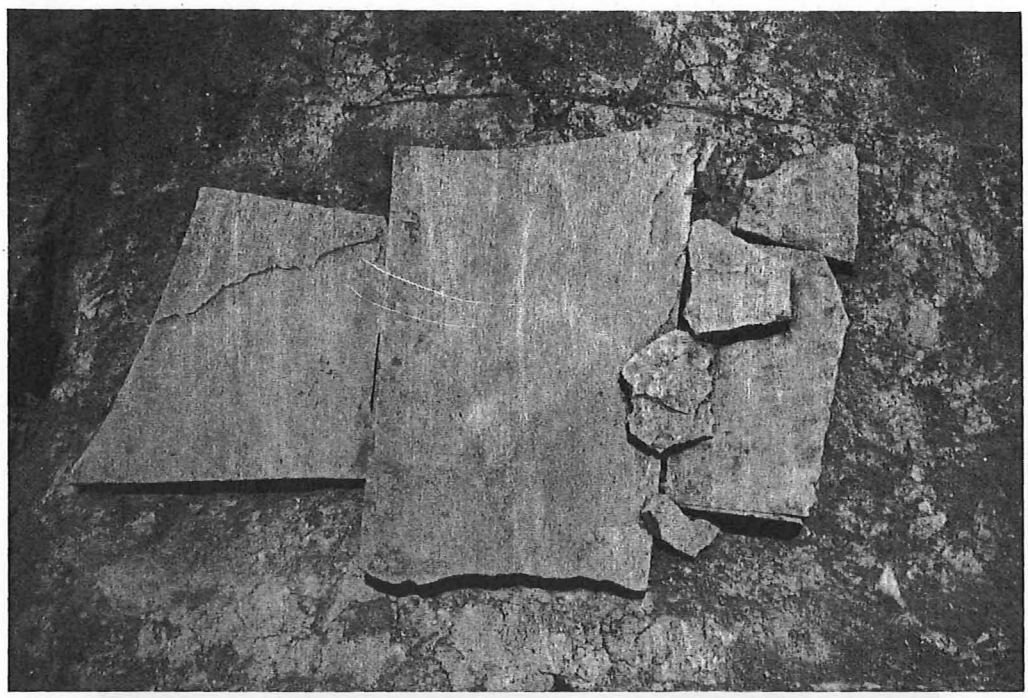
図版 2

1．調査風景

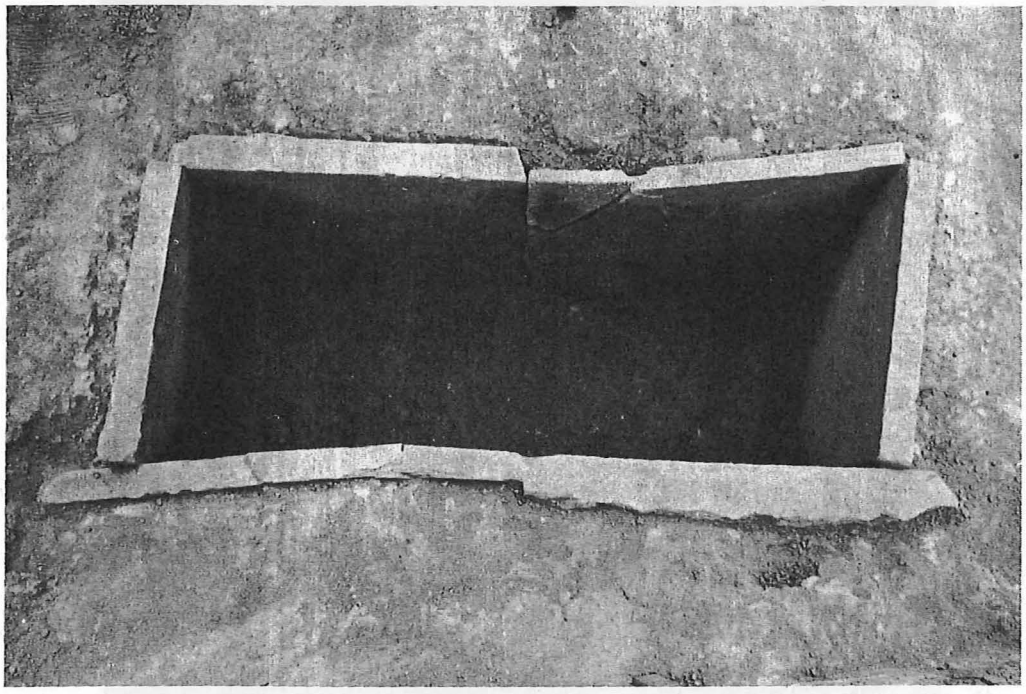


2．講習会風景

図版3　1号石棺



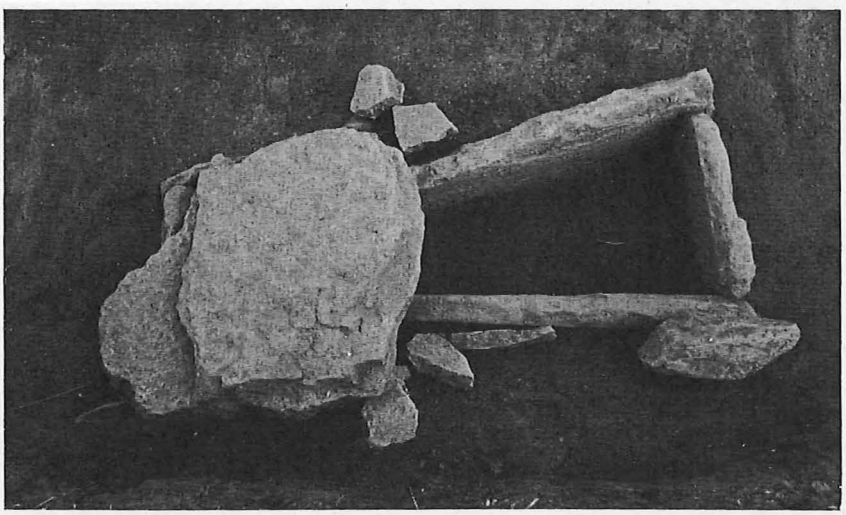
1．棺　蓋



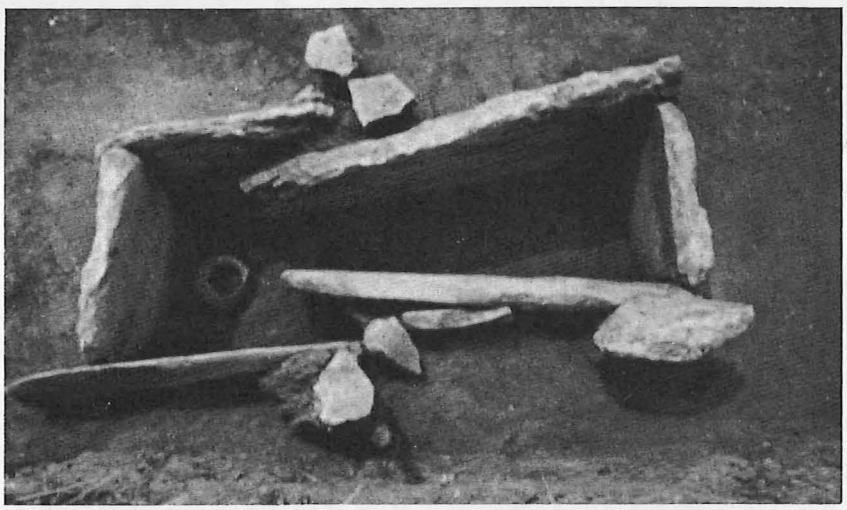
2．棺　身

図版4

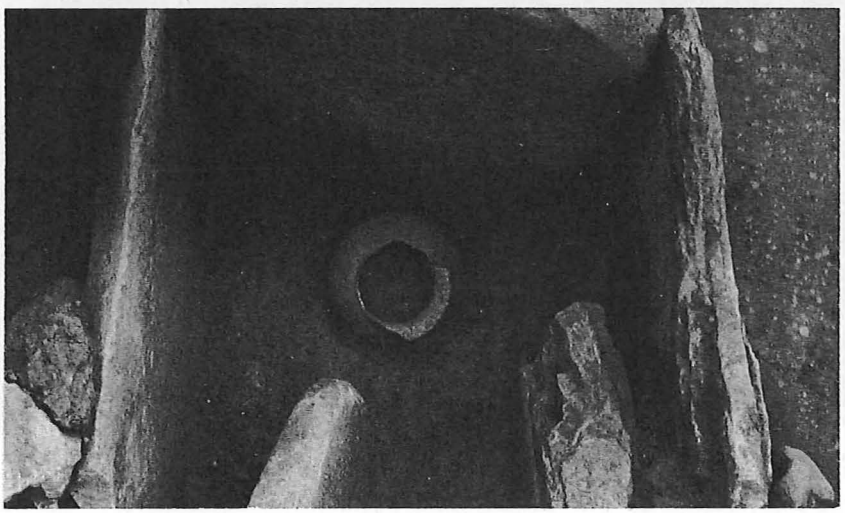
2号石棺



1 棺蓋



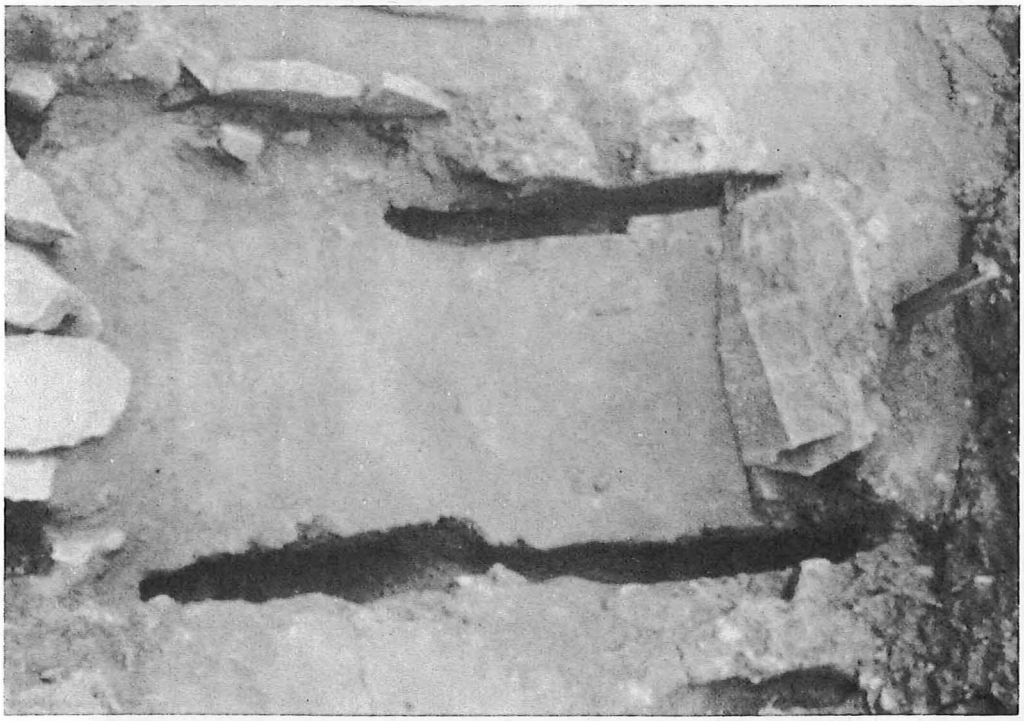
2 棺身



3 遺物出土状況

図版5　　3号石棺

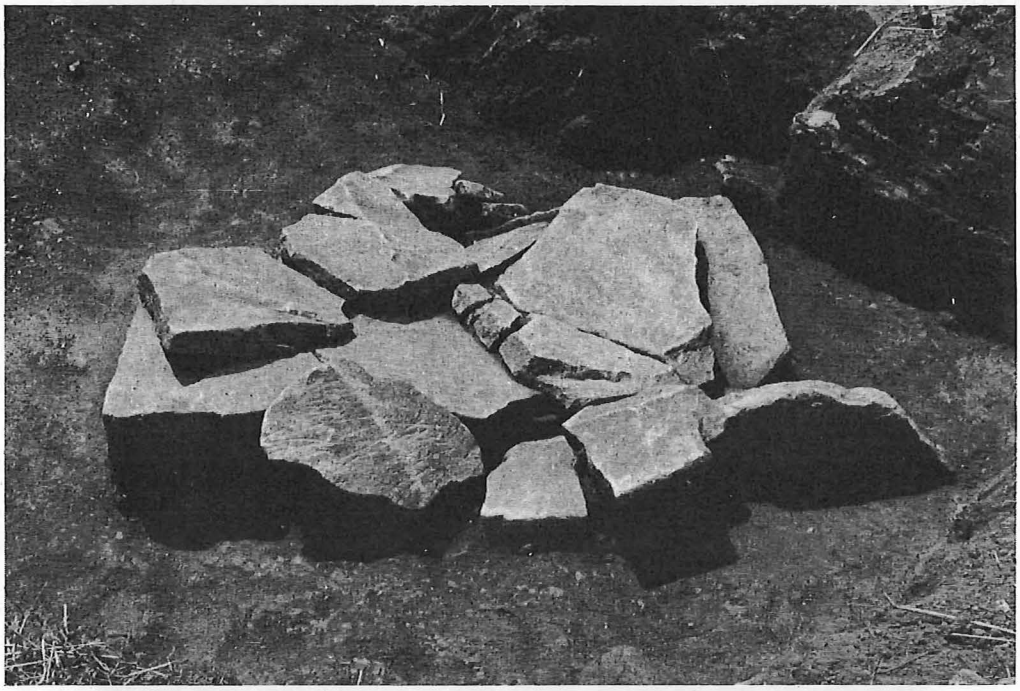
1．全　景

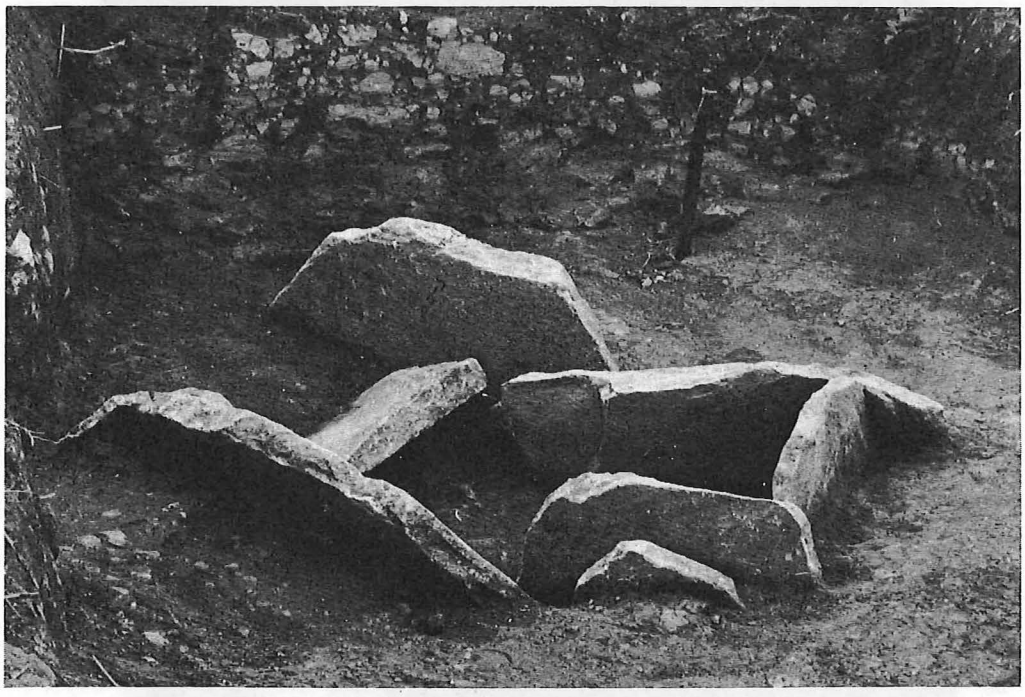


2．石材抜跡

図版 6　　4 号石棺

図版 7　　5 号石棺



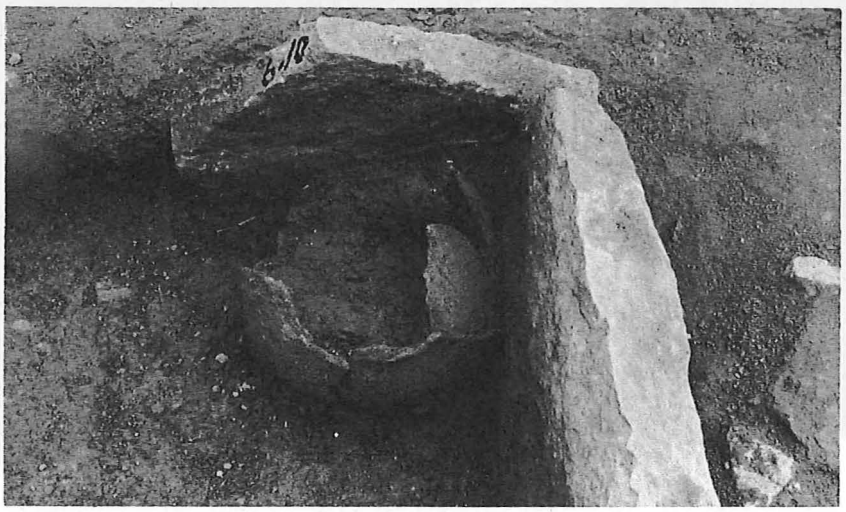


図版 8

6 号石棺

1 全景

2 棺身及墓壙



3 遺物出土状況

図版 9

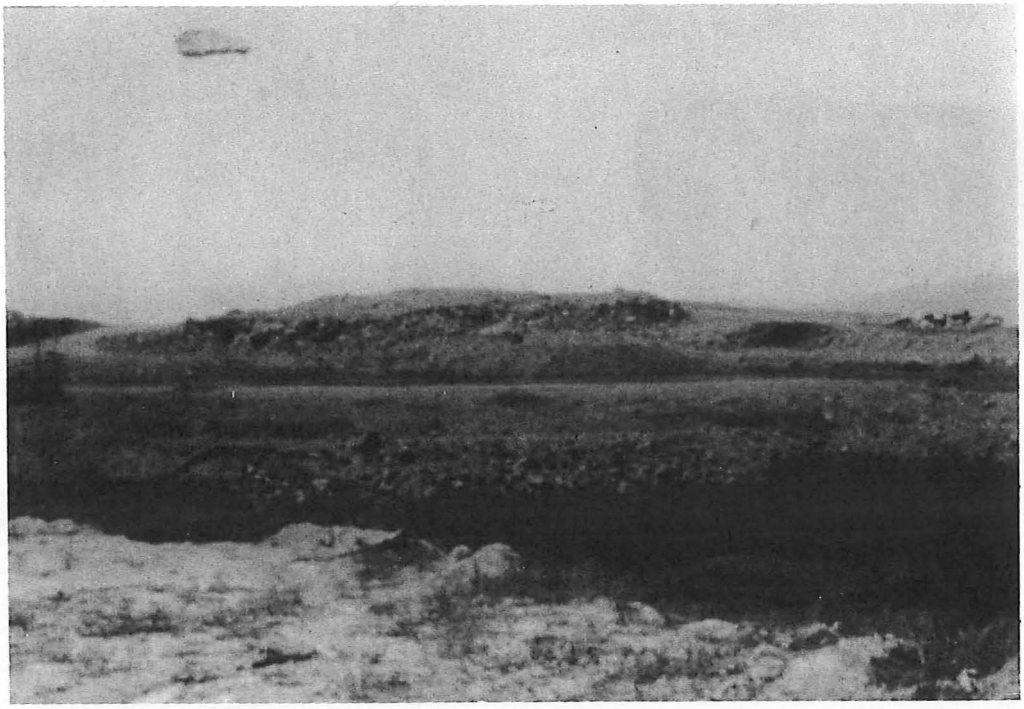
1．1号石棺出土鉢形土器

2．2号石棺出土壺形土器

3．6号石棺出土壺形土器

4．攪乱層出土石鏃

図版10



調査後１年を経た遺跡（中央の小高い丘が化屋大島）

あとがき

調査後１年を経て報告書を出すこととなった。遺跡は今宅地化され原形を留めていないが，公園の一角に移築復原されることとなったのは喜ばしいことであり，多良見町教育委員会，熊谷組の方々の御尽力に感謝したい。

本報告書を作成するにあたり，多くの方々の御協力をいただいたが，県文化財専門委員石丸太郎氏には昭和38年調査時の状況や当時の実測図を提供していただいた。又，旧土地所有者の石田鉄夫氏には所蔵の１号石棺内出土の土器の実測，撮影に御快諾を得，遺跡発見当時の模様をお聞きすることができた。これらの方々に謝意を表してあとがきとしたい。　　（1974.8　井上）

多良見町教育委員会発行調査報告書目録

第１集　伊木力川遺跡

第２集　化屋大島遺跡

化屋大島遺跡

——西彼杵郡多良見町所在弥生時代
石棺群の発掘調査記録——

昭和49年８月31日

発行所　西彼杵郡多良見町
多良見町教育委員会

印刷所　(有)昭和堂印刷
諫早市幸町 622－４
電話　代表②6000